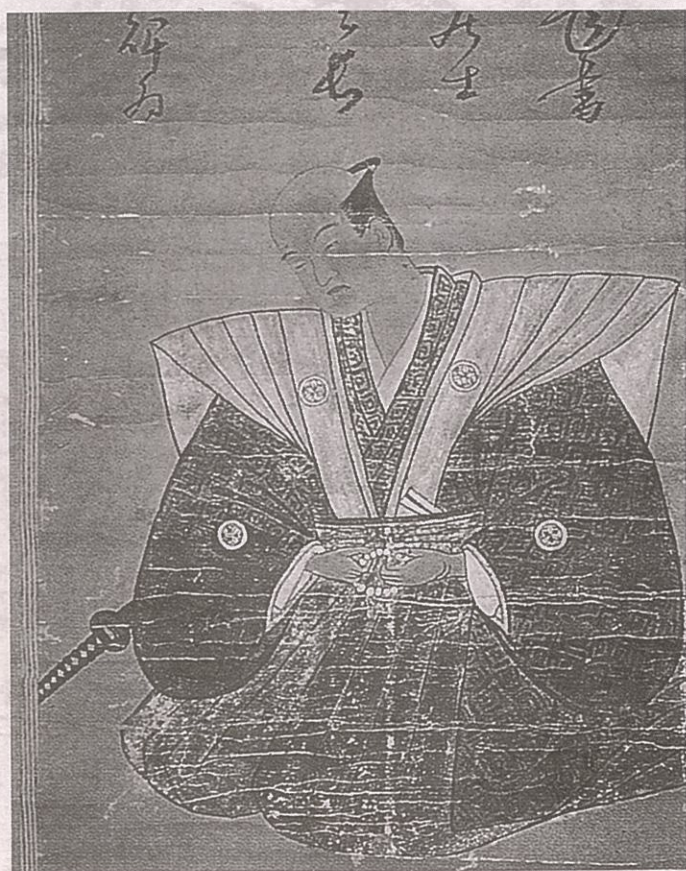


北伊予の傳承

II



松前町東公民館

〔表紙説明〕



華藏庵由緒（永田）

一・題字 仙波文治（徳丸）

一・松崎新蔵絵図（部分）

横田村庄屋の新蔵は住民の生活意欲の喚起や、独立自営の精神涵養を期待して、藩に決死の提訴をした。

安永三年（一七七四）四月二日、藩の採決は新蔵の訴えを退けた、直後別室で新蔵は、割腹自決したのである。

新蔵の兄（姉婿）は、与五左衛門元政といい、延享二年丑歳（一七四五）八月、義父郷政の後を嗣いで明和四年（一七六七）まで二二年間横田村庄屋を務め、義弟新蔵に職を譲って明和七年（一七七〇）八月二〇日、出作村の庄屋となった。安永三年（一七七四）南黒田鷺野家に寄寓したが、天明二年（一七八二）、横田村の飛地であった永田村の景勝の地に華藏庵を再建した。松山法龍寺和尚の隠居所にするためである。由緒書に次のとおり述べている。

伊予郡横田村庄屋式拾八年相勤弟新蔵江相統出作庄屋相勤候内当花藏庵及大破造建仕候処法龍寺方丈曉和尚御隠居被成度御望ニ付右庵造建之節従村方与五左衛門相渡候証文共御譲申候地藏堂二間者其俣客殿庫裡御建直被成候而御目附御支配相成申候与五左衛門ヨリ先祖代々井得応和尚為菩提庵前新畑有八畝得米四斗五升永代寄附仕候依之先祖位牌建申候様被仰付如斯相印申候以上

天明二寅歳二月 法名保山道寿居士

伊予郡横田村松崎与五左衛門元政

発刊にあたって

物から心の時代へと言われ始めてから、もう久しい。最近、郷土の先人や身近な祖先の生きざまに学ぼうとする地元学が盛んになっています。東公民館では先に、松前町誌に載っていない話を収録した「北伊予の伝承」が発刊され、更に「北伊予の歴史を語る会」が結成されましたが、会員の高齢化に伴い立ち消えとなりました。これを憂え、その意志を継承し「北伊予の伝承・第二集」の発刊をしてはとの地域の要望により準備委員会を発足しました。

町の予算化も進み、大字毎に推薦された方々によって編集委員会を結成、会合を重ね、編集方針や内容の具体化、資料の収集と整備・編集・校正を行い、未熟ながらも第二集発刊の運びとなりました。これが、いささかなりとも地域の方々のお役に立てればと願っています。ここに皆様方のご批判・ご意見を頂き、更に伝承を掘り起こし、第三集の作成に取り組む計画ですので、何分のご協力をお願い致します。

本誌の発刊にあたり、献身的なご尽力を頂いた編集委員各位、地域の方々に深甚の謝意を表します。

平成七年三月

松前町東公民館長

高市

徳

目次

〔徳丸〕

① 田中夷子神社	1
② 高忍日売神社	1
③ 七生稻荷神社	2
④ 生目八幡宮	2
⑤ 若宮八幡宮	2
⑥ 高忍日売神社の環濠	3
⑦ 虫千祭	3
⑧ 四季農耕図（絵馬）	4
⑨ 高忍日売神社の大松	4
⑩ 本性寺	5
⑪ お庚申さん（庚申石）	5
〔中川原〕	
⑫ 重信川の旧堤防	6
⑬ 中川原渡し	7
⑭ さいの神泉	8
⑮ 極楽道と庄屋の墓	9
⑯ 戦国時代の墓後群	10
〔出作〕	
⑰ 出作遺跡	11
⑱ 恵依弥二名神社	12
⑲ 恵依弥二名神社境内末社	13
⑳ 恵依弥二名神社御神宝（石剣等）	13

②① 二名神社天狗の絵馬の由来	14
②② 二名神社と築城御用木の供出	14
②③ 平岡左近の供養塔	15
②④ 吉祥寺の由来	15
②⑤ 吉祥寺の「胡瓜封じ」の行事	16
②⑥ 山郷寺の庚申祭り	16
②⑦ 地藏盆（北・西組）	17
〔神崎〕	
②⑧ 弁天島が消えた	17
②⑨ 安養寺と川柳和尚	19
③⑩ 藪神様と宮島さん	20
③⑪ 「蔵の元」の由来	21
③⑫ 中世の墓石群「青石さん」のこと	21
③⑬ ちちぶさん	22
③⑭ 伊豫神社国幣社昇格申請	23
〔鶴吉〕	
③⑮ 竈神社（へつついさん）	25
③⑯ 農業用水施設第一号	25
③⑰ 二つの常夜灯	26
③⑱ 地藏堂の由来	26
③⑲ 鶴吉の六地藏さん	27
④⑰ やぶ神さん二題	27
④⑱ 屋敷神さん信仰	28

④②	とくじきさん (とくじきさん)	28
④③	庚申信仰	29
④④	石鎚神社信仰	29
④⑤	鶴吉の三塚	30
	〔横 田〕	
④⑥	ヤクシマさん	30
④⑦	地藏 (南組)	31
④⑧	素鷲神社	31
④⑨	横田遺跡	32
⑤⑩	塚跡4ヵ所とそのたの塚	33
⑤⑪	郷蔵敷跡地とそのまわり	34
	〔大 溝〕	
⑤⑫	御祈祷	35
⑤⑬	素鷲社	35
⑤⑭	庚申堂	36
⑤⑮	菅谷半之丞の碑	36
⑤⑯	六地藏	37
⑤⑰	地藏尊	37
	〔永 田〕	
⑤⑱	三つ川について	38
⑤⑲	庚申堂跡	38
⑥⑰	庄屋道と屋敷について	39
⑥⑱	鎮守神社跡地Ⅰ	39
⑥⑲	鎮守神社跡地Ⅱ	40
⑥⑳	華蔵庵と平家落人伝承	40

⑥④	ダイバ神楽	41
⑥⑤	小富士松由来記について	41
⑥⑥	根上がり松	42
⑥⑦	塚三基	42
	〔東古泉〕	
⑥⑧	東古泉村の成立と性格	43
⑥⑨	明治初期の東古泉村	43
⑦⑰	ふるさと東古泉の歴史	44
⑦⑱	稲納屋 (稲屋)	44
⑦⑲	辰之助信仰	45
⑦⑳	秋祭りの行事	46
⑦㉑	御祈祷	46
⑦㉒	念仏講	47
⑦㉓	亥の子	48
⑦㉔	「ホゴ吊り」の話	48
⑦㉕	「タノモ」さん	48
⑦㉖	明治年間・豊作と不作の記録	49
	〔参考資料〕	
	北伊予の職業 (明治から戦前)	50

① 田中夷子神社

・伝承地 大字徳丸



古くから高忍日売神社の鬼門の守護神として祀られ、上市夷子とも呼ばれた。鎌倉時代には月三回の三斎市が開かれ、室町時代には月六回の六斎市も開かれ多くの人々で賑わった。しかし、その後守護大名の支配力が強まるとともに、商工業者は城下町に集められ、市は衰退して行った。祭りは九月の社日に行われる。社は神籠石と呼ばれる礫岩で造られた祠であったが、その後木造の社になり、何度か建て替えられて現在に至っている。

蛭子神社Ⅱ出雲の美保神社を宗社とすると、祭神は事代主命、上市エビスは蛭子尊が祭神だろう。エビスとダイコクの違いは、祀る方向が異なる。エビスは東向き、ダイコクは南向きに祀る。なお服装の違いも明瞭である。

(後藤正宜記)

② 高忍日売神社

・伝承地 大字徳丸

・宮司 後藤正健

・主祭神 高忍日売神

・配神 天忍人命 天忍日女命 天忍男命

創立年代は不詳であるが、聖徳太子が道後に来られた時に立ち寄られ、神号扁額を奉納されたと言われる。平安時代の延喜式神名帳に記載されていることから、創立年代はかなり昔に遡ると思われる。祭神の高忍日売神はその昔、神武天皇の父君である彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊がお生まれになる時、天忍人命・天忍日女命・天忍男命を遣わされ、母君の豊玉姫尊のお産を助け、無事安産されたという由来から、産婆・乳母の祖神、安産の神、箒の神として信仰されている。鎌倉時代には、源頼朝をはじめ守護の河野家からも崇敬され、神領の寄進を受けている。この頃から社名を高忍日売若宮八幡宮と称したが、江戸前期には再び社名を高忍日売神社にもどしている。江戸時代は、松山藩の祈願所として崇敬され、現在も代官詰所が残っている。

【国宝海部氏本系図】よりの部分抜粋

・正哉吾勝々也速日天神穗耳尊—天照国照彦火明命—天香語山命—村雲命—天忍人命…(八二代)海部光彦

(後藤正宜記)

③ 七生稲荷神社 しちしょう

・ 伝承地 高忍日売神社境内（末社）

昔、ある若者が貧乏のため、病気の母親の薬も買えず困り果て、この社に二日間毎日お参りした。すると目の前に白髪の老婆が現れ、その老婆に手を合わせたところ、たちまちその姿を消した。それからは、母親の病氣も治り、若者は金持ちになったという。（後藤正宜記）



（神社の神使）

春日神社 鹿
 厳島神社 鹿、鳥
 日吉神社 猿、鹿
 石清水八幡宮 鳩
 稲荷神社 狐
 氣比神社 鷲
 松尾神社 亀
 熊野神社 烏
 伊勢神宮 鶏
 出雲大社 蛇
 北野神社 牛
 三島神社 鰻
 愛宕神社 猪、鳶
 大黒天 鼠

④ 生目八幡宮 いきめ

・ 伝承地 高忍日売神社境内（末社）
 ・ 祭神 鎌倉権五郎景政

鎌倉権五郎景政は鎌倉時代の武將で、戦の時、敵の放った矢が眼に刺さり、家来が抜こうとしたが抜けず、さらに顔を足で踏んで引き抜こうとしたので、景政が怒って自分で矢を引き抜いたという故事から、眼の神様として崇められている。（後藤正宜記）

⑤ 若宮八幡宮 わかみや

・ 高忍日売神社境内（末社）
 ・ 祭神 大鷦鷯命（仁徳天皇）

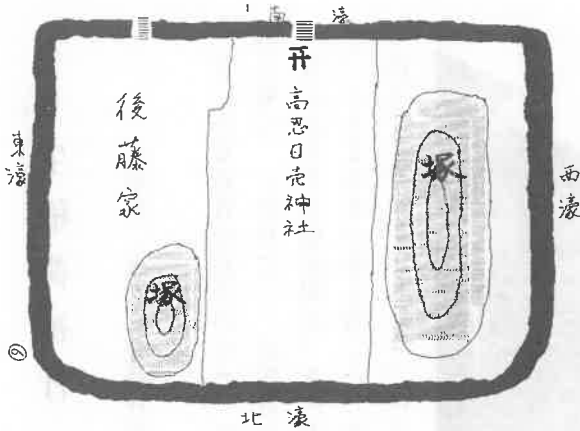


若宮とは皇子のこと。八幡神は菅原別命（応神天皇のこと）だから、若宮八幡とは大鷦鷯命（仁徳天皇のこと）である。いつ頃境内に勧請されたかは不詳であるが、恐らくは鎌倉期以降のことであろう。一時期、高忍日売神社本殿に奉祭され高忍日売若宮八幡宮となったことがあったが、その後再び分祀されて現在に至っている。（後藤正宜記）

⑥ 高忍日売神社の環濠

・伝承地 大字徳丸

江戸時代の寛永年間頃まで、高忍日売神社を中心に、東は神主後藤家、西は本性寺付近までが幅二―三間の濠で囲まれていたらしい。現在、神社の南と北、本性寺の西の小川は、その環濠の名残りであるという。寛永頃まで本性寺やその付近の民家はまだなかった。西の濠は本性寺を創設した時に埋め立て、東の濠は元禄年間に後藤家が東隣に分家屋敷を建てた時に埋め立てしまった。



また、北の濠は、その北に後藤家隠居屋敷が建った頃はまだ幅も二―三間あったが、隠居屋敷が衰退して取り除かれて田圃になって後には次第に狭くなって現在のように小川になってしまった。

(後藤正宜記)

⑦ 虫干し祭

・伝承地 大字徳丸 高忍日売神社

松山地方では七月中に夏越祭とか輪越祭とか呼ばれる祭が行われているが、この祭は、茅の輪をくぐることによって身心の邪気を落とし、無病息災を願う祭である。高忍日売神社では、八月二日にこの祭を行い、この日に神衣や神宝等の虫干しを行っていたので、特に虫干祭という名称がある。

・行事内容

七月中に氏子に雛形が配られ、その雛形に名前と年齢を書き、八月一日の夜に自分の布団の下に敷いて寝る。翌朝起きた時、その雛形で体をなで、息を吹きかける。その夜の虫干祭にそれを持って氏神様に行き、茅の輪をくぐり、神社拝殿の祓所でお祓いをしてもらうのである。そして、神札をいただき、その神札を家の戸口に貼って邪気退散を願う。

八月二日の夜は氏子のみならず近在の人々が参拝し、夜店が立ち並び、また、余興も行われて多勢の人々で夜遅くまで賑わう。

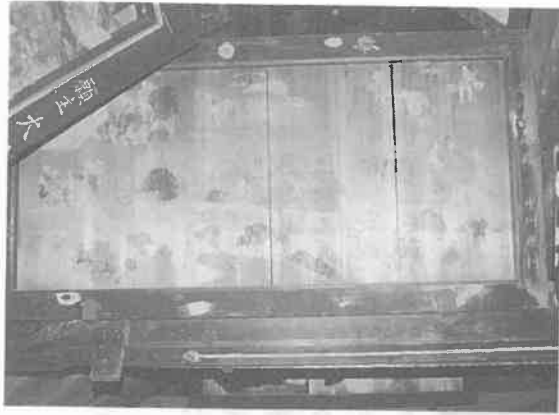
・参加者 氏子(徳丸・中川原・大間)の他、近在の崇敬者

・世話役 氏子総代・氏子の有志

(後藤正宜記)

⑧ 四季農耕図（絵馬）

・伝承地 大字徳丸 高忍日売神社拝殿



高忍日売神社拝殿には、江戸後期から末期にかけて氏子から奉納された大きな絵馬が数多くあるが、その中でも、日本全国でもめずらしい四季農耕図がある。安政五年に中川原村から奉納されたもので稲作の様子が順序よく描かれている。近頃絵の具の剝離が著しく、絵が薄れて来ている。文化財として認められれば修復できるのだが……。『教育の町』松前町の文化行政に期待したい。

（描かれた農業技術）

・耕起・代掻き・播種・苗取り・苗運び・田植・種粃浸し・除草・揚水・刈取り・稲束運び・乾燥・脱穀・選別・粃すり・俵詰め・蔵入れ・その他（風呂敷包みをもつ母親と少児、包みは焼米か？）貴重な資料、全国でも三例しかない。

（後藤正宜記）

⑨ 高忍日売神社の大松

・伝承地 大字徳丸 高忍日売神社境内

高忍日売神社は県指定天然記念物モガシをはじめ、多くの大木がある神社だが、かつて当社の北西の藪に大きな松の木が生えていた。この松の木は、石鎚山に登る途中からでも発見できたと言われるほどの大木であったらしい。

さて、松山城は元は五層の天守閣であったが、寛永九年に三層に改められた。しかし、天明四年に落雷により焼失し、幕末の嘉永五年に再建された。この時、その用材として切り出されたのが、この大松であった。当社から重信川を渡し終えるまで、その運搬に約一ヶ月を要したという。そして、松山城天守閣の棟木として用いられた。



松山城天守閣

⑩ 本性寺

・伝承地 大字徳丸三九三番地

由来等については、松前町誌に詳細に出ているが町誌に書かれてない部分について誌す。

大松、寺院境内に、黒松の大樹（目高胴廻り二m）が新築の本堂に映えて信仰心を高めている。

この大樹は、安政二年（一八五五年）の大地震の終息を記念して植樹されたものであり、また同じ時三千坊墓



地にも一本植えられた。

以来一四〇年を経て

墓地の大松は先年松食虫に喰われて枯れた。

徳丸の大樹で植樹年の明らかな大樹は他に見当たらない。

その美観と建物との調和は永く伝えたいものである。

本堂（平成元年に着工同三年一月落慶）本尊として、大塚由紀夫佛師作の金剛界大日如来像が金色に輝いている。また境内には、大賀博士が発芽させた古代蓮がある。毎年花どきには数千年前の香りが夜も明け切らぬ寺内に充満し、極楽もかくやと荘厳の極みである。

（田中義和記）

⑪ お庚申さん（庚申石）

・伝承地 大字徳丸三八一番地
・由来 不詳

材石 自然石 高さ〇・五五m 安山岩

厚さ〇・三七m

幅 〇・五五m

昭和の終り位まで、庚申の日に二三人の人が供物を持ってお参りしていたが、今はもうお参りする人も絶えて久しい。

他に徳丸には庚申石は見当たらず、秋のお祭りに「見

ざる」「聞かざる」「言わざる」の三つの猿の絵が書かれた提灯がかげられたのを知る人も少ない。

庚申信仰については松前町誌に詳らかに書かれているので省略する。

（田中義和記）



⑫ 重信川の旧堤防

・伝承地 大字中川原

豊臣秀吉が天下を統一して、文禄四年（一五九五）に加藤嘉明が松前城に封ぜられると、足立重信に命じて、矢取川付近に大堤防工事を起こさせて、下流一帯を堤防で固め、今日のように、北西の方向に改修させ、松前城を川の氾濫による危険から守ろうとしたのだといわれている。

堤防には松を植え、地固めをし、二〇〇mくらいの間隔において、川の中央に向かって直角に三〇mくらい突き出した鎌投げを造り、水流を中央に向かってはね流すようにしている。これは足立重信の後にできたもので、大川文蔵の考えた工法であるといわれている。

中川原の堤防には五か所の鎌投げがあつて、一番鎌は徳丸との境に近く、井門泉からの用水樋の上にあり、次はねだれ鎌といつて、渡瀬の西にあり、三五度くらい傾いた大松が鎌投げの先端に植えられていた。

その西に水小屋鎌といつて、その上に松山藩の水防小屋があり、次いで半三郎鎌といわれ、一番しもは尻切れ鎌といつて、大間との境にあつた。

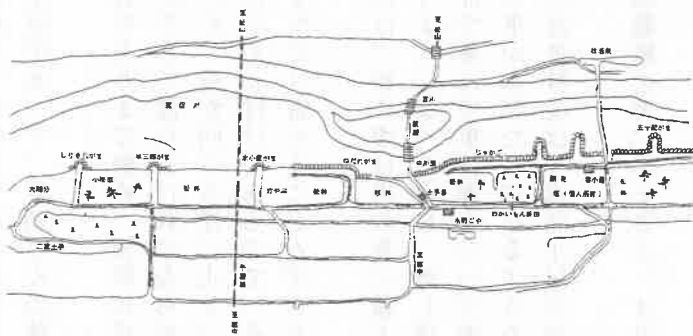
以上五つの鎌の先端は何れも大石で石垣が積まれ、その先端周囲は木枠を組み、それを蛇籠で覆い、大水が出

ても鎌投げをいためない仕組みになつていた。蛇籠は竹を割つて直径四〇cm長さ五mくらいの籠に編んで、その中へ礫をつめたのである。

これを鎌投げの周囲へ敷き並べて、水流にて土砂が流されないようにしていた。洪水で流れが強くと、蛇籠が流され石垣が破損されそうになると、土手の松を切つて、鎌投げの先端の大松の幹へ鎖でつなぎ、鎌投げの先端の水流の中へ投げ入れ、水流を川の中央へはねるようにしていた。

また、堤防の決壊を防ぐ方法として、二重土手を造り、内土手が切れても外土手で防ぐようにしていた。内土手を越した水は、また重信川へ還流するように樋を造つていて、田の流失を少なくするように工夫されていた。

（加藤敏之著「ふるさと」より）



重信川旧堤防

⑬ 中川原渡し

・伝承地 大字中川原

松山と伊予市を結ぶ道路は、中川原橋を通る県道となっているが、この橋の架けられる以前は中川原渡しであった。松前町には、この渡しの外に出合い渡し、北川原渡し、塩屋渡しがあった。

中川原渡しは、現在橋のかかっている所あたりで、村の人はここを渡瀬と呼んでいた。渡瀬とは瀬を渡る所だからである。大水が出ると、川一ぱい水が出て、流れないので川止めになるが、暫く経って水が減り、瀬となる頃は瀬は一つの場合も、二つに分かれて流れる場合もあるが、渡し場は一つの場合も、二つに分かれて流れる場合もあるが、渡すことがある。だが毎年大体同じ場所に設けられていたようである。

渡し場の株を持っていたのは、道光寺の住職水本義旭さん、石鎚山の信仰山伏加藤元治さん、武智才次さんの三人でしたが、のちに大正に入って藤田国五郎さんに変わっている。舟頭は明治の終わり頃まで、武智与七、山本藤八、加藤佐十郎さんの三人が交代でしていたのとである。

加藤英寿先生（神崎）のお話では、渡し舟があっても、流れが強く渡れにくい時でも、着物を脱いで頭にしば

り付け、胸まで水に浸り、流れを渡って松山の学校へ通ったといえますから、松山の学校へ通う人は、大変な苦勞をしたものらしい。

渡し舟は平底で前後に区切ってあって、前へは荷物を後へは人に乗せるようになっていたという。渡し賃は明治の初め頃は三厘、中頃から五厘、大正頃は一銭であった。渡し場には竹で組み合わせ、その上を藁でふいた円錐形のトンガリ帽子型の小屋があって、舟頭さんの休憩所になっていた。

渡し守は、日の出から日の入りまで勤め、夜間は自宅に帰るので、夜分に用件ができて渡らなければならぬ者は、自分で舟を使用していた。舟が向こう岸に止まっているときは、呼び綱が舟にくくり付けてあるので、それをこちらから引いて、舟をたぐり寄せることができたので、舟を寄せて渡った。

米を松山へ売りに行くには、初め頃は馬の背に積んで渡っていたが、荷車を使うようになってから、渡し場で車から米をおろし、米を舟で運んで車は瀬をひいて渡ることもあるし、水が深くて車が水びたしになるような場合は舟で運んだ。中川原の渡舟料金は、水防小屋の前に掲示してあった。

（加藤敏之著「ふるさと」より）

⑭ さいの神泉

・伝承地 大字中川原

昔の中川原集落の東端であった井口佐蔵さん宅の東の田の、道路に面したところに泉があり、これが「さいの神泉」と呼ばれ、昔から伝わっている。

昔は、村々ではその入り口のところに神を祭って、小さい祠を建てていた。この泉の西南隅にもさいの神といて、小さい祠があつた。さいの神は齊の神、塞の神、財の神、幸の神と書かれ、またみさきさんとも呼ばれていた。これは疫病や害虫が村へ入ってこないように、村を守るため村人の願いによつて祭られた神で、村を幸にする神なのである。

風邪をひいて咳や熱が出ると、この神様をお願いすれば全快するといわれて「たごりの神様」と信じられ、また「はしか」に罹る子供があればお参りをして全治を祈りました。種痘をするとう然痘から守ってもらうように祈りました。病気が全治するとそのお礼に、小さい足仲ぞうりや、小さいわらじを作つて神様に供えました。種痘が全治すると赤い小さい紙幟を立てて感謝しました。こうして子供を病氣から守つてくださる神様の小さい祠の前には、人々のお参りがありました。

私が子供の頃は、おさいの神さんのお祭りといつて、



は天王さんの南西の隅にコンクリート塀に沿うて並んでいるお室（むろ）の中の大きいお室がそれです。医術の進歩した現在では忘れられてしまつて、お参りをする人もなく、ぞうりやわらじのお供えもなくなつた。

（加藤敏之著「ふるさと」より）

道祖神ありし泉の澄めりけり

山本 山桃

冬の日に子供たちが村の家々へお米を集めに行つて、その年の当番の家で五目飯を炊いてもらつて、にぎり飯を作つて神に供え、集まつてきた者に配つてお参りをしたことを覚えている。この泉のほとりの神様も大正に入つてから、素鷲神社の境内へ移された。今

⑮ 極楽道と庄屋の墓

・ 伝承地 大字中川原

宗金寺と素鷲神社との間に塀にかこまれて墓地へ通じる道路があり、極楽道とよばれている。昔はこの道は宗金寺の西門から出て墓地に通じていて、まわりから塀で境されて、宗金寺よりほかからは通じていませんでした。今の西門は昭和二年に宗金寺が改築された節に、道光寺と合併し、その隣の高森さんの屋敷をとり入れて寺の敷地としたので、昔の西門は今の観音堂の北にあった。

村内に死者が出ると、必ず寺で葬儀をした。僧侶の読経が終わると、西門から極楽道に出る。墓地への突き当たりには代々の法印さんのお墓が並んでいて、死者を迎えてくれる位置にあり、昔からの古い家はこの付近に墓地がある。昔は墓地への通路はこの道だけで、他からは通じていなかったが、墓地を拡張するにつれて、素鷲神社の西の杉垣を開いて墓地への入り口ができた。

庄屋の墓は、極楽道の突き当たりの法印さんの墓の東側にあり、代々の庄屋さんの墓が並んでいたが一か所にまとめられ、一基の墓碑が建てられている。

「大政六左衛門正興、延宝三卯年（一六七五）十二月逝去以降累世納骨、大政家の墓地整理、安政二年春（一八五五）、明治二十六年二月、昭和二十年十月、これを正す。

墓碑二十有七基、地下に瞑す。」

・ 以上が墓碑銘にあるのを見ると、二七代の庄屋の家系であること、三回にわたって墓碑を整理したことがわかる。最後の庄屋は大政幸作さんで、明治になって他町へ出られた方ですから、この人によって墓地整理をなされたのではなからうかと推察される。

庄屋の屋敷跡は公民館の西隣の田で、現在は本田さんの屋敷になっていて、庄屋さんの後継者は中川原にはいません。

（加藤敏之著「ふるさと」より）



極 楽 道

⑩戦国時代の墓碑群

・伝承地 大字中川原

中川原は明治以前は、中河原と書いていました。中河原の地名が古書に出ているのは、河野家の史書である、「河野家譜」の中に、元龜三年（一五七二）に中国の毛利勢が、松前の浜、今出の浜に上陸して、道後の湯月城（河野氏）を攻めに來た時のことが記されている。

この時、井門郷の高井城主・土居左馬之介通利と、同一族でその西の井門にいた、井門右衛門尉通知、その息子宗左衛門義安の三名が、大間・中川原に進んで來た敵毛利勢を迎え討ち、これを川内の北へ追い散らしたとある。

このとき、中河原・大間は戦場になったので、土地は荒れ、民家は焼かれ、食料は奪われ、住民は逃げていたので、村は疲弊した淋しい農村であった。

明治の終わりから、大正の初めにかけて、村の耕地整理をしたが、それ以前には村の田の中、道端、野原の草むら等、至る所に、塚、五輪塔、その他戦死者を葬った跡とみられる石畳が沢山あった。これらは耕地整理のとき整理されて、今残っているのは少数だが、それでも宗金寺の東側の加藤一弥さんの田の真ん中に、お塚さんの草むらがあつて、戦国時代の死者の墓跡をみることで

きる。（加藤敏之著「ふるさと」より）

近年、大字がこの田を借り受け、コミュニティ広場を造成の際、このお塚さんは新墓地へ移転された。



新墓地のお塚さん

さう言へば塚らし草の萌ゆるなり
戦国の塚と伝へて畦を塗る

山本 山桃

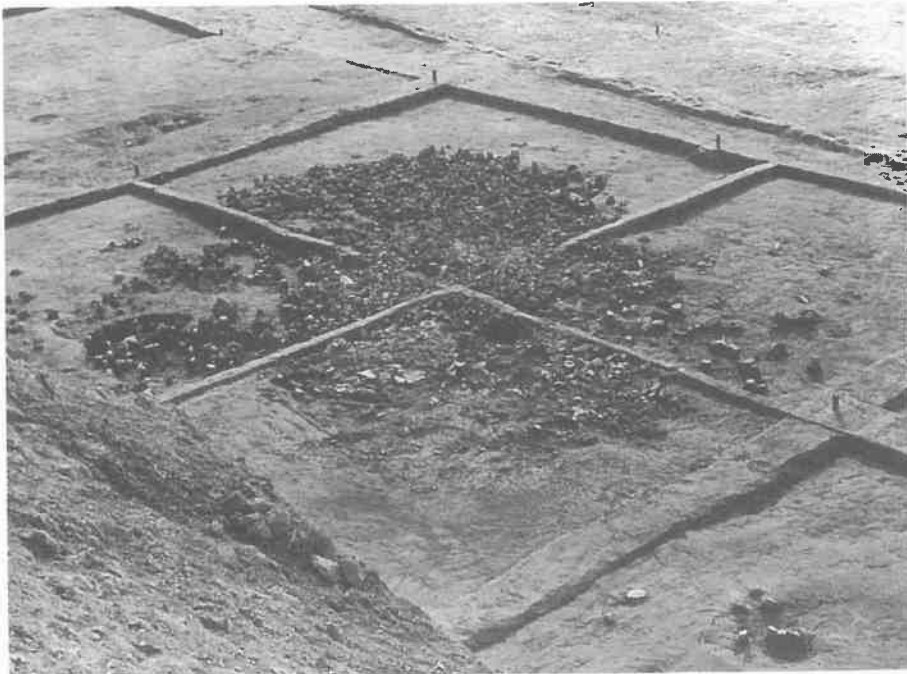
⑰ 出作遺跡（五世紀・四国最大の祭祀跡）

・伝承地 大字出作四七八―一・四八一番地

昭和五二年（一九七七）圃場整備事業の際発見され、緊急発掘された古墳時代中期（約一五〇〇年前）の大規模の祭祀遺跡である。この遺跡は、伊予川（井門・八倉・徳丸・出作等を経て松前港）（現重信川）によって形成された沖積平野の標高一五m前後の氾濫地に立地している。遺跡の範囲は東西約一km・南北〇・三kmに長く広い範囲が想定されるが、今回の発掘調査は遺跡の一部（約三〇〇㎡）であって、漸く一部神秘の扉が開かれたもので、今後に期待されることが大である。調査後直ちに埋めもどされたが、大小の祭祀遺構や方形竪穴住居をはじめ多数の焚火跡などが検出された。発掘のうち、須恵器、土師器をはじめ祭祀用ミニチュア土器や石製模造品（勾玉、剣形、円板、白玉、未製品）さらに鉄製の農工具や斧（ミニチュア）鉄鋌（鉄素材）屑鉄など膨大な遺物が累々と供献されている。

この遺跡は、五世紀中期から新来の須恵器を伴う五世紀後半と考えられ、永く盛大に祭りが営まれている。

これら祭祀には諸説はあるが、王は民衆の存亡に係わる重大な危機に、水に祈り、豊作を祈願するため取り行ったといわれている。



出作遺跡発掘現場

当時、文化・政治・経済に高度のものを持ち先端技術集団（須恵器・鉄器・石製模造品）を直接管掌し、大陸との外交・畿内勢力との交流もあり、松山平野を支配して

いた国家的権力者の存在があり、背後には相当の人口と集落があったといわれている。

特に鋤、鍬のミニチュア鉄器は福岡、沖の島の宗像神社で発見されており、四国では珍しく、又畿内の天皇陵に指定されるような大規模古墳からも出土しており、出作遺跡からも少量ながら同質のものが発掘されている。

須恵器も各種各様で伽耶系（朝鮮）陶器系（畿内）非陶器系（伊予市市場南組）が混合発掘され、特に非陶器系土器は、県内の東山古墳群・五郎兵衛谷古墳群・東野のお茶屋古墳群・畑寺古墳群・福音寺竹ノ下遺跡・同筋違遺跡等に供給されている。特に黒色土師器の出土も異色である。又鉄器製造に必要な鉄鋌（ねりがね）も珍重され大部分が大陸からの輸入によるものといわれ、経済力の強大さをものがたっている。

これら詳細は町教育委員会発行（一九三三）「出作遺跡」（埋蔵文化調査報告書）で報告されており参考にされたい。

今後は出作遺跡の全貌の解明が強く望まれるが、首長の古墳の在所、鍛冶遺構の確認が課題となっており、機会あるごとに発掘調査を続行し問題点の解決が望まれるものである。

（西村博明記）

⑱ 恵依弥二名神社

- ・ 伝承地 大字出作三〇四番地（北分）
- ・ 宮 司 高市慶久
- ・ 主祭神 恵日売命
- ・ 配 神 伊豫津彦命、伊豫津姫命外一四柱



当社の創設は景行天皇の御代と伝えられ、主祭神恵日売命は伊豫の国御霊であり、伊豫の古宮として、往古より伊豫二名本宮と称え、古くには伊豫大社五社大神と称し、本宮伊豫神社・伊與二名神社・伊豫古宮・愛依日宮・正八幡宮の五社が一境内に鎮座していた。社地六町四方に及ぶ大社として古くには現社地の北方約一〇〇m余りのところに鎮座されていたが、慶長五年（一六〇〇）兵火により社殿、宝物、楼門等ことごとく焼失し、慶長一一年一社に合祀された。

（高市慶久記）

⑪ 恵依弥二名神社境内末社

・伝承地 大字出作・二名神社境内

○素鷲神社

祭神 素盞鳴大神すさののおみ（疫病除）を主祭神とし奈良原神社（宇気母知命）農耕五穀豊穡の守護神を、併せて金刀比羅宮（大物主命）海上守護の神様をお祀りしている。

○生目八幡神社

主祭神 平景清命を祀る神社で、明治四二年四月一八日、鶴吉がさの大政喜一郎願主により、鶴吉がさ（二名神社氏子）から遷移祀られた神社で眼病の守護として崇敬があつた。



またこの末社に和霊神社（祭神山家清兵衛公頼命）その外、出作楠木さんといつて祀られていたホノギ（楠）の楠神社が合祀されている。

そのほか、昔二名神社の東側にあった天神原に祀られていた天神社（菅原大神）学問の神様が合祀されている。

（高市慶久記）

⑫ 恵依弥二名神社御神宝（石剣等）

・伝承地 大字出作・二名神社

二名神社の北西約二〇〇mの地点にある宝剣田遺跡は、明治初期とも古く寛政の頃とも言われており、この場所から後光がさしていると、村人等には不思議に思い恐る恐る発掘したところ弥生前期の有柄式石剣（三三cm）及び玉（火崗岩）鏡が出土、恐れ多い事だと言って、二名神社へ御霊としてお祀りし、当時は「伊豫本宮宝剣加持」といった守護を氏子に頒布お祀りしていた。

この石剣などは、豊作と安全祈願の祭祀に使用され鎮められたものとも思料される。また、鎮められたところに積石三個が置かれているが伝えられるところによると、この積石の西側に三四個の列



石があつたと言われており、（積石までの参進路とも考えられ、現在でも神事の前行う祓所として、積石されている神社がある。

なお、この石剣は韓国のものと言われており古代人の交流等貴重な資料とされている。

（高市慶久記）

②1 二名神社天狗の絵馬の由来

・伝承地 松前町大字出作 二名神社

昔々雨の少ない旱魃の年がありました。米、麦の大作の人は自分の田んぼのほかに、松山藩の田地、その他多くの田地を耕作するため、作男（農耕を手伝う農夫）をたくさん雇っていた。雨が無いのでその年は田植の準備が出来ず、早乙女（田植を手伝う女の人）を大洲の方へ頼んでいたが、これを変更しなくてはならなくなり、電話も急の郵便もないころ、地主さんは作男に話したところ、走るのが早い一人の若者が私が大洲へ連絡に行きますとこたえ、すまんが頼むといって大洲へ走らせた。今のような道でなく大変だった事でしょう、若者は自慢の足で連絡を終わり、犬寄峠まで帰り一休みしたところ、そこへ天狗さんが現れこの事情を聞いて感心し、天狗さんが雨を降らしてやろうと、扇で空に向かって扇いだところ急に空が暗くなり大雨になり、田植が出来たそうです。主人が天狗さんにお礼をしなければと、氏神様に絵馬を奉納されました。



奉納者 西村喜代助

（西村栄氏談）

②2 二名神社と築城御用木の供出

・伝承地 大字出作 二名神社

古書によると、二名神社は、往昔六町四方の社地をもつ大社で、境内には畳八枚も敷ける楠の太木が亭々と繁茂していたと記録されている。さて、近世になり城の普請材に良木の供出を命じられることとなり御用木として伐採供出したことが伝承として村々や、社地に伝わっている。二名神社も松山城天守閣再建（弘化四年から嘉永七年の間）に用材として楠の木を供出しており、伐採した脇芽が同掲の写真のように成長し、歴史を静かにものがたっている。伊予神社は楠・高忍日売神社は松材が夫々献木されている。



楠の脇芽

（西村博明記）

②③ 平岡左近の供養塔

・ 伝承地 大字出作 二名神社境内

慶長五年九月一七日(約四〇〇年前)当地地頭(領主)

平岡大和守通房入道左近房実(通称年若き故平若左近と言う)は毛利輝元に一味して松前城を改め、三谷村(現在の三谷)で合戦、敗北して討死し、その亡骸を家来七名が鶴吉、神崎を経て連れ帰り氏神の西方に埋葬しその墓前で七人の臣自刃し、主君左近と墓をならべりとか・・・大正末から昭和初期の頃、道路新設に伴い現在二名神社西側に移し祀られたと伝えられている。

この戦のとき西風強く、兵火により神殿、幣殿、楼門



平若神社と供養塔

その他ことごとく焼失、その時別当寺吉祥寺も焼失したと伝えられている。また、この合戦の後、夜ごとに走る首なし馬の鈴の音、ひづめの音を鎮めるために毎年八月一二日に行っている大念仏供養も、この平若左近にまつわる行事と言われている。

(高市慶久記)

②④ 吉祥寺の由来

・ 伝承地 大字出作三〇五番地

本寺の開基は、天正十一年(一五八三)とされ、「農夫七郎衛門、夢に恵良^{えりようびよう}廟に遊ぶ、廟の椋の梢に光彩を放ち、声あり、われ空海なりと、ここに大師の像を得て精舎を営むと、又一説には二名神社の那木に大師が降臨^{こうりん}影向^{えいこう}したといわれ、弘法大師像が安置されている。開基後幾星霜、「出作の目引大師さん」として、地元は申すに及ばず、久万郷・中島諸島・長浜・松山方面に信者をもち元禄年間には特に繁栄したという。境内には降臨の那木や大陸伝来の掛仏・町内最古の手洗鉢・同灯籠もある。通夜堂では明治一三年開達学校の分校として又明治四二年出作夜学会創設(修身・算術・農業・藁細工)出作の子弟の教育の場として使用されていた。



古木の那木大師降臨影向



吉祥寺々々紋
(輪違い)

(西村博明記)

②⑤ 吉祥寺の「胡瓜封じ」の行事

・伝承地 大字出作三〇五番地

目引大師として檀家は勿論、広範囲に信者をもち崇敬された出作の大師さんに、昔から「胡瓜封じ」という珍しい又ありがたい行事がつづけられている。

この秘法は、高野山の管長であった鎌田大僧正氏直伝の「胡瓜加地秘修法」で大正年間、現末光清光師が教示をうけ、爾来たえることなく加持祈祷が行われている。

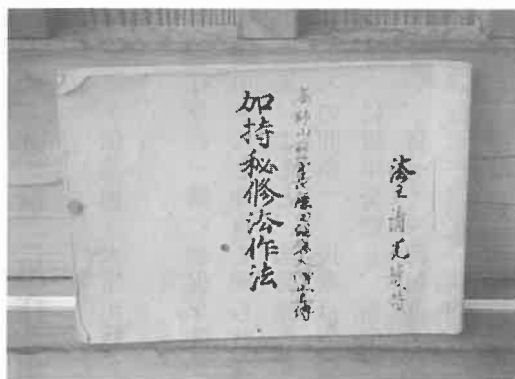
最盛期は近隣の僧侶二〇名の協力を願い実施したこともある。信者の持参した胡瓜に秘法を施し、諸悪、諸病

を封じ、その退散を願った。

現在では東予地方の一寺院で盛大に行われ毎年新聞報道もされている。

・日時 毎年土用丑の日

・世話役 吉祥寺
(西村博明記)



加持秘修法秘伝書

②⑥ 山郷寺の庚申祭り

・伝承地 大字出作二一五番地

山郷寺の庚申祭は、その起源はさだかでないが、相当長い歴史をもち、現在に至っている。最初は六軒で祭祀を行っており、場所も現農協Aコープ玄関あたりに存在していたが現在安置されている場所の西側に移轉、其の後諸種の事情により現在地に移動された。

守護神は猿田彦命が祭られ又昭和三〇年時代宮司高市慶史さんが遷移、現在にいたっている。これは地域の幸福や健康、豊作等を祈願し祭りは脈々と伝承されている。山郷寺組も約四〇余戸に増加し毎年盛大にお祭りが行われている。

・行事内容・日時 毎年田植終了後の日曜日

・行事 組中が

供物をし参拝

終了後手料理

による懇親会

実施

・世話役 当番
制

(西村博明記)



②⑦ 地藏盆（出作北組・西組）

・伝承地 大字出作・吉祥寺境内

吉祥寺の一隅に享保年間から祀られている地藏が、現在庚申さんと仲良く祀られている。

伝承によると、当時悪疫が流行し、農産物の不作やいろいろな問題で、民衆は疲労の極に達し民心不安定となりここに組中発願し、信仰により悪疫の退散や平穏無事を願い、併せて享保飢饉の犠牲者の供養をしたものといわれ、毎年一回集い回向している。

・日時 毎年八月二四

日

・行事 北・西組各戸
集合回向する。

終了後恒例によりソ
ウメン・酢物・ピール
等手料理で懇親会（大
字集会所）で実施
・世話役 当番制

（西村博明記）



②⑧ 弁天島が消えた

・伝承地 大字神崎・大上組

北伊予中学校へ向かってＪＲ予讃線裏から道路が作られた。その為神崎のこのあたりの昔の面影は全く無くなってしまった。当時私は今のうちに何とか記録しておかなければ、昔のことは忘れられてしまうのではないかと深く思い、一番の古老であり、弁天島に近い所に育ち住んで居られた加藤英寿先生（今は故人）をお願いして記憶しておられる事を語ってもらい、今から約二〇年前に大要をまとめて記録した。以下はその話をもとに書き綴ったものである。

鉄道線路から西へ二〇～五〇m位の川（しんで川）幅は一〇m以上もあり、広く魚も沢山いた。約二〇〇年前には中程に泉が掘られ枠がすえられて、いい水が湧き出て神崎の農地をうるおしていた。当時の人達はその水がいつまでも続くようにと泉の東の所に、小さな島を作り、七福神の一人で水の神様の弁天様をお祀りして、小さな祠を建て松の木も植えられた。それから後、誰言うもなくその島を弁天様、弁天島と言うようになった。

それ以後毎年弁天様のお祭りには神官にお願いして、厳粛な祭典が行われ、部落の人達のお参りも多く、子供相撲なども行われたとのことだ。もちろん島は狭くて出

来ないので、今の犬上組の幟立石の立っているあたりの畑を借り土俵を作って、そこで賑やかに行っていたとのことである。

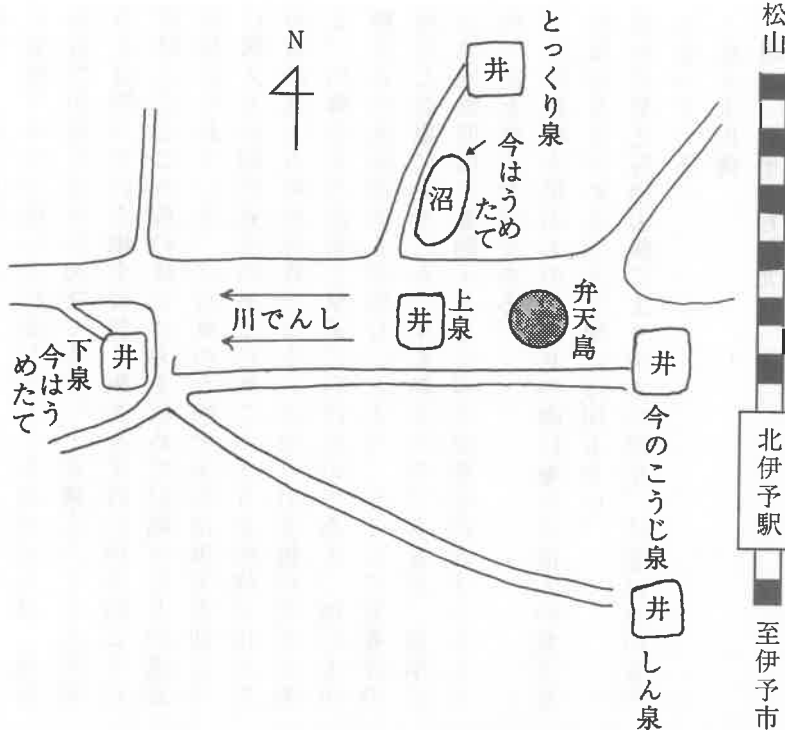
明治八年の政令により弁天様は伊予神社に合祀されている。私の物心ついた頃には弁天島には祠もなく松の木もなく草の茂る島だった。

その後歳を経るに従いしんでの泉は、泥がたまり湧出が悪くなり、下の方に泉が掘られた。その泉を下泉と言ったのでしんで泉は上泉と言われた。その上泉は湧出しなくなった為に、今度は少し上手に新しいこうじ泉が掘られた。丁度JR線路の真下になっている。この、こうじ泉から小井手で、しんでの川へ水が流れていた。その、こうじ泉も昭和の始め頃、JRの鉄路が敷かれるため、どうしても埋めなくてはならなくなり、すぐ西の現在の所に新しく掘られた。現在は埋め立てられ揚水泉がある。

今は弁天島のあったしんでの川の道路には、桜と銀杏が交互に植えられ、脚元にはつつじが植えこまれ並木道となっている。春は花、秋は紅葉が美しく昔の弁天島を語っているかのようだ。

弁天島界隈のしんでの川で泳いだり、魚を獲ったり又蛸を追ったりした昔を偲ぶすがは全く無くなった。しかし現在も弁天島をとりまいて、とつくり泉、こうじ泉、しん泉と三つの泉があり、揚水ポンプが据えつけられて

昔の弁天島あたりの見取略図



(野本忠和氏談)

② 安養寺と川柳和尚

・伝承地 大字神崎字向井三七一番地

明治の二〇年位まで今の正岡氏宅に晴光院の庵寺として安養寺があった。起源などについては現在確かめる文書が無いが一角に俗人の墓三十基ばかりと歴代の庵主と思われる数基の墓石が現存している。又神崎土地台帳には寺の寺域三畝二〇歩と記され大字神崎持と記されている。寺が何時頃の起源かは定かでないが相当長期間実在したのは事実である。今回は安養寺の最後の庵主佐々木川柳和尚について述べよう。川柳さんは元、仙台藩士と言われている。というのは或る日芝居小屋の刃傷事件のため追われ他国に逐電の



意を決し奥州安達ヶ原（福島県安達郡一带を言う）を三日三晩松葉を噛みながら通過した由、西国を目指し此処安養寺に落ちのびて庵主として一生を終えたのである。川柳さんは庵主のかたわら農事に励み晩年は幾ばくかの田地を買い求め農を営みとした。幕末の頃

大井手川近くで農作業に努めていた際、松山藩士が火縄銃にて大井手川に狩に来て川柳さんの農作業の近くで盛に発砲するので危いと抗議したところ彼の武士は「水呑み百姓が何を言うか切捨てるぞ」と身構えたところ川柳さんは持っていた鍬を持替え鍬先を手許に柄を向こうに對峙したところ彼の武士は刃を収めて引揚げたとの逸話が伝えられている。之は唯の百姓であれば鍬先を向こうに構えるが剣の覚えのあるためこのような所作に出たため彼の武士も唯の百姓ではないと知り引き揚げたのである。川柳さんの武術と氣迫に負けたのである。他にも川柳さんの逸話があるが他日にしよう。かくして安養寺の庵主と農事にいそしみ一生を終えたのであるが、後年には池内權四郎を養嗣子として迎え安養寺の寺守りとしての一生を終えたのである。

今は往時を偲ぶものは東北の隅に庵主や俗人の数十基の墓石をとどめるのみで他には何もない。

因みに晴光院過去帳により夫々の没年、法名は次のようになっている。

・佐々木川柳

明治一七年六月一九日 没

法名 玉水川柳首座

・養子 佐々木權四郎

昭和一四年一二月五日 没 七四歳

法名 冬雲良晴居士

（加藤 平氏談）

③⑩ 藪神様と宮島さん

・伝承地 大字神崎向井南組

藪神様の祠は高市晴喜氏宅の進入路口に在り、発祥は元庄屋の藪神で鬼門封じのためと伝えられている。樟やクロガネモチの太木や竹藪・杉垣が生い繁り、旧屋敷を取り囲んでいた。祖父の代には、毎月朔日に供物と灯明をささげてお祭りをしていた。道行く人もおがんで通った。

この太木の日陰に当たる水田は稲や麦の育ちが悪く、戦時中、食料増産のため伐採された。

昭和五七年、町道拡張工事に際し、少し移動したいと高市氏の承諾を得たものの、施工業者が敬遠してそのままになり、道路にはみ出した形になっている。

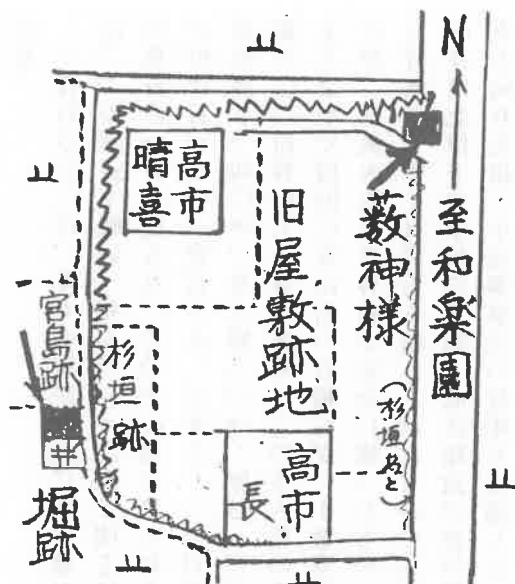
○宮島さんは、私が子供の頃、高市長氏宅の西側に小さな祠があり、そばに堀があった。社日には組内の子供たちが集まって草を引き、くずれかけた瓦屋根をふき直して祭りの準備をした。各家からお米と小銭を集め、宿元の家で五目飯のおにぎりを作ってもらい、灯明をささげて参拝した後、宿で会食をして遊んだ。

何時しか祠も崩壊し、堀も埋められ、今では狭い跡地の草むらが認められる。

(高市 徳記)



藪神様



③① 「蔵ノ元」の由来

・伝承地 大字神崎

元愛媛県知事、久松定武氏の先祖であるお殿様は、神崎大井手橋の北側から川に沿って上流の方へ、水田を沢山所持していた。

現在の小字名は、神崎の畦田・宮田・石の元・ウツド・ウツトチ・実安等大変広範囲にわたっていた。

このように多くの水田を所持していたお殿様は、年貢米を入れるための大きな米蔵をかまえたのである。その場所が、現在白石浩三氏の住宅の西側にある竹藪の所である。

この蔵の付近を神崎の古老の人々は、殿蔵と呼んでいる。

そのようなことから、この付近を「蔵ノ元」という小字名がついたそうである。

(高石友春談)



③② 中世の墓石群「青石さん」のこと

・旧所在地 大字神崎字栗田分四五三番地と四五五番地にまたがる約一〇㎡の畦地にあった。

平成へと時代が移り、農業の近代化は益々緊急性を加速すると共に圃場整備には更に拍車がかかった。昔は数十年を単位として、ほんの少しの変化がみられた環境も、今は一年単位で大変化を遂げることもしばしばである。こうした変化も、その後の状況に馴れるに従い順次昔の記憶を失い、やがては、みんなに忘れ去られる運命をたどる。

「青石さん」は、多くの地が戦乱に明け暮れた時代に、この周辺で戦い、死んでいった武士団を供養し弔った墓石の一群と見られ、その中心部に祭られる緑泥片岩の板状石がその「青石さん」である。この自然石は地上部の高さ一四〇cm、最大幅八〇cm、厚さ一三cmで推定重量三〇〇kg程の大きさである。この主人格の青石を守るような型で周囲に安山岩の五輪石が、十数基分残っていたが、空風火土の各輪が完全に揃ったものは残念ながら皆無で、多くは異石を積み上げたものであった。その所在は北伊予中学校の北側、成武建設の資材置き場から東の向井北組、小池満雄氏の倉庫を見通した線上のほぼ中間点に位置し、約一〇㎡の台地とも畦とも見分けがつかない。

かない状態の中にあった記憶がある。

現地は平成三年度の圃場整備事業に伴い禪正軒へ移転、跡は、平らに整地し大区割に均分されたが、この工事に先立ち被葬者の鎮魂を願ってお祓いを受け、工事関係者の安全祈願を行ったものの、その効ありやなしや、折しも事業推進の責任ある地位にあったT氏の体調が急変すると共にブルを操作していたK氏にも同様の現象が起こり、改めて更に崇りを鎮めるためのお祭りを行うなど、いろいろ興味ある話題を提供したが、工事はほどなく無事完了するところとなり、農地は所期の目的を達成しつつある。

(山口稲男記)



現在の青石さん
(禪正軒墓地北東すみ)

③3 ちちぶさん

・伝承地 大字神崎一三四番地

昔、母乳を出してくれる神様「ちちぶさん」が、県道八倉、松前線沿いの神崎一三四番地(大西商店ポストの西)に祀られていた。

母乳の出ない人が、御神酒の代わりに甘酒をお供えして、おがむと乳が出るようになるというので、多くの人がお参りをしていた。

お社がなかったが組の人が寄附金を集めて、小さなお社を建ててお祀りした。

道路の拡張に伴い、昭和の中頃、伊予神社境内に移転された。

現在も、拝殿の北東に祀られている。

(小笠原晋氏談)

“ち”のつく語

血・地・父・乳・大蛇
かかち いかつち
大蛇・雷



③4 伊豫神社国幣社昇格申請

・伝承地 大字神崎一九三番地

今は知る人も少なくなったが、伊豫神社は明治二三年に国幣社に昇格方を申請し、明治三〇年に宮内省より属官青山盈氏が来県し、調査の結果昇格を認められたが、基本金貳萬圓（当時の米価一俵に付三円六〇銭）の積立を要するので、その造成について一部有力者の賛成を得ることが出来なかつた為に遂に沙汰止みとなつた事は返すがえすも残念な事であつた。

春風秋雨五〇年、栄枯盛衰は世の慣ひとは言いながらこれ程の名社も一時は専任神職も無い程に荒廃してしまつたのである。今左に其の申請の写しを掲載する。

愛媛縣伊豫郡伊豫村伊豫神社ハ祭神伊豫国魂愛比賣命ニシテ神代ヨリ鎮座ナリ、故ニ伊豫神社ト称シ奉ル、然ルニ孝靈天皇ノ皇子彦狹嶋命勅命ヲ蒙リ伊豫国ニ下リ給ヒテ伊豫郡伊豫村ニ宮殿ヲ營ミ給ヒテ国内ヲ統治シ人民ヲ撫育シ給ヒシヨリ、国人伊豫皇子ト称ヘテ崇敬奉リケル。爰ニ久シク座シマシテ開花天皇十三年四月ニ薨給ヘルヲ今岡ト云所に葬奉ル。其後景行天皇十二年ニ至リ其神靈ヲ伊豫神社ノ相殿ニ併祀シ奉リテ旧号ノ儘伊豫神社或ハ伊豫村ノ神トモ称ヘ又親王宮トモ申シ奉ル。如此止ン事無キ神社ニ付古ヘハ朝廷ニモ御尊崇有テ延

喜神名式ニハ名神大ニ列セラレ又度々神位ヲ授ケ給ヒ神封ヲ寄給ヘリ事ハ別紙ノ通り古書散見セリ、実ニ本国ヲ於テハ並ヒナキ神社ナルヲ維新ノ際縣社ニ列セラレ候義ハ遺憾此事ニ付、仰キ願クハ今般当社ヲ以テ国幣大社ニ列セラレン事ヲ希望ノ至ニ不堪候也。

崇敬

往古ヨリ神德最隆ニ靈驗炳ケク国民尊信スル處ニテ源判官義経伊豫守ニ任セラルルヤ厚ク当社ヲ尊敬シテ出軍ノ度々勝利ヲ当社ニ祈レリ、祈請文モ宝蔵シタリシヲ文永年間火災ニ罹リ宮殿宝庫一切烏有ニ属スト云傳フ、河野氏一家当国ヲ押領セシ砌ニ至リ同氏モ当社ヲ信向シテ再ヒ宮殿ヲ造築セリ（今ノ宮殿是ナリ）爾來加藤家久松家ノ所領ト成テモ当社ヲハ殊更ニ崇敬シ江戸參勤ノ出帰ニハ必ス奉幣アリ、維新以來縣社トナリシヨリ人民ノ申請ニヨリ愛國講社ト名称シテ信徒ノ結合ヲ爲シ爰ニ三萬餘名ノ多キニ至レリ、思フニ当国ノ国神タル伊豫津彦命ハ国家ヲ開拓セシ祖神ニシテ一般其ノ餘蔭ヲ千年ノ後ニモ仰慕シテ斯ニ至ルモノナルベシ。

伊豫神社御祭神

彦狹嶋命（第七代孝靈天皇の皇子）

愛比賣命（伊豫の国總神にて神代より鎮座）

伊豫津日古命（久米郡伊豫豆比古命神社の主神に

して伊豫久米両郡の開拓神）

伊豫津姫命（伊豫津日古命の妃神）

日本根日子太瓊命（孝靈天皇のこと）

細姫命（孝靈天皇の妃）

速後神命（神武天皇第一皇子神八井耳命の御子孫）

伊豫国造となり下向し給ふ

別紙

統日本紀云天平神護二年夏四月甲辰伊豫国久米郡伊豫神從五位下充神戸二烟類聚国史云天長八年三月壬子伊豫国伊豫神領於名神

三代実録云貞勸四年九月十八日甲申授伊豫国從五位上伊豫村神從四位下同八年閏三月七日壬子伊豫村神授正四位下 同十二年八月廿八日戊申授伊豫村神正四位上

新抄格府云伊豫神二戸 清瀧宮勸請神名帳云伊豫村大明神 二月堂神名帳云伊豫村大名神

延喜神名式云伊豫国伊豫郡伊豫神社名神大

右神社ノ義モ当国ニ於テ格別ノ由緒有之目今縣社格モ被差置候ヘ共各国ニアリテハ官社ト相成候 神社ノ比例ヲ考ルニ此ノ如キハ何レモ官社ニ御取扱相成候右ハ維新ノ際社格御調ニ付上申候者ノ不行届ヨリ地方廳ニ於テモ左程迄ノ見込不相立ノ致處ニ候得共臣通福当社奉仕居候テ是迄上申不仕モ神慮ニ対シ其職ヲ盡サザルノ恐萬ニ有之候 就テハ出格ノ御詮議ヲ以テ何卒官国幣社ノ内ヘ御昇

格被成進度ニ付別紙由緒取調書相添此段奉願候也。

明治廿三年三月

愛媛縣伊豫郡北伊豫村
縣社伊豫神社祠官

高市 通福

この文章は伊豫神社社務所發刊の「志んのぶ」に掲載されたものを転記した。

（野本 勉記）

靈宮社伝に曰く。

……（前略す）、
勅を奉して当社を建て大明神と号す。靈宮といひ、又親王宮と云ふ。右の社伝は、靈宮の祝今泉弥平太夫紀兼光、応安四年辛亥正月二八日、記する所の本を以てこれを写せり。と（応安四年（一三七一）、すでにこの時代に社伝があつた。



③⑤ 竈神社 通称へっついさん

・伝承地 大字鶴吉三軒屋《宮前七四番地》

無病息災と五穀豊穡祈願。記録にあるものとして、祭神は奥津彦命。奥津姫命。三軒屋組中の相原、済川両家が祭主として維持守護としてきた。本殿は明治四二年境外末社として伊予神社に集合移転された。

社有田として鶴吉橙木一一二番地六畝六歩。鶴吉宮前一五番地三畝二二歩であったが、農地改革でなくなった。小作米として明治四二年一石三斗三升九合とある。

二対の幟の字は原寸大の障子紙に三輪田米山と相原賢の書いたのが残っている。



小社ながらも松林の参道まであつた。幟の立て倒しに困つて、代りに大尺の日の丸の国旗がはためいていたのを覚えてゐる。

写真の拝殿は組の祈禱懇親の場であつたり、雨天の際の子供らの遊び場にもなつた。戦後は組の共同利用の農機の置場に使われた。

(済川 裕記)

③⑥ 農業用水施設第一号

・伝承地 大字鶴吉

写真のモーターは昭和の殆んど全期にわたり稼動揚水米作りに大変役に立つた記念の物で、そのプレートに大阪川北製作所5号とある。廃棄するに忍びず保管している。ポンプの方は荏原六吋二重羽真鍮製で型が大きいので止むなく廃棄した。設置時の日記(済川琳二郎氏)をみると、昭和二年六月一五日より七月七日迄雨はなかつた。上井手掛りは田植ができなかつた。抜本的旱魃対策として電気揚水に決断した。動力線架設。井戸掘り六月二八日より四日間、一日当り約六〇人出役、約一五m×五m深さ五m三重木枠。その間ポンプ購入に大阪に走る、ポンプ価格四九〇円、米価一俵に付一一円の時七月二日揚水開始。従来の跳釣瓶(はねつりびん)や出作からの導水に比べ吐出量の多いのに歓喜したと言ふ。鶴吉の総力を結集した画期的事業で近在第一号電気揚水施設であつた。その後は何処も急速に電気揚水が広がつた。この事業に格段の指導援助を頂いた方が福島正巳氏(当時県農会技師、正利氏の父)であつたと聞いている。



(済川 裕記)

③7 二つの常夜灯

・伝承地 大字鶴吉



鶴吉安井東組と伊予神社境内にある常夜灯は、その大きさ、構造ともに非常によく似ている。二つの建立も殆んど同時代で神社のものは慶応二年、安井のものは慶応四年となっている。神社境内のものは位置を転々と変えながら現在の所に落ちついた。安井のものも北によった。献灯の対象となっている神々は、二基に共通なものは天照皇太神（太神宮）、金毘羅大権現、石鎚大権現であり、神社のものには三島宮大神が加わる。氏神伊予神社に関係ある神である。

金刀比羅宮への献灯は、金毘羅街道に金毘羅への道しるべとともに数多く立っているが、街道から離れたこの地区にあるのは厚い信仰のせいであろう。それぞれの「講」に加入している信者の浄財による建立である。（久津那安男記）

③8 地藏堂の由来

・伝承地 大字鶴吉



①鶴吉安井から伊予市上野に通ずる道路がＪＲ予讃線の堤防切を渡ったすぐ左にコンクリートブロックの小堂に安置されたお地藏さんがある。線路の土手と高い道にはさまれた深い谷間にあるが堂前にはお供物がたえない。もともと道ばたの木造のお堂で里人の生活や旅人の安全を見守ってくれる野の仏、道祖神と同じ信仰でまつられたもので、特に霊験あらたかなお地藏さんであった。

②正覚南墓地に、最近改修された地藏堂がある。中に享保六年と刻まれているお地藏さんがある。

一説には、このお地藏さんは安井中組池田清さんの屋敷内にあった。いつかわからないが、ここに移された。昔の人は池田さんの家を「地藏のものと」呼んでいたそうである。

（池田 清氏談）

③⑨ 鶴吉の六地藏さん

・ 伝承地 大字鶴吉

① 正覚北墓地のお地藏さん

北墓地には目鼻のはっきりしないくらい古い年代の六地藏がある。正体は完全な形であるが、一番左（南）の一体は上半身だけである。誰かが、どこかで下半身をみつけてきたが、つなぎ合わせると、どうしても不自然で別のものようである。

ハゼやクスの根でお地藏さんの台座がかたむき、お立ちになっているのも大へんなご様子。

② 正覚南墓地の六地藏



南墓地の六地藏さんは北のものより大分新しい感じがする。三体が一つの台座に立っておられるが、しっかりと安定しておられる。

これも年代不詳

笑みをたたえ、六道の輪廻に苦しむ衆生を救済されているお姿はまことに尊いものがある。

（相原隆志記）

④⑩ やぶ神さん二題

・ 伝承地 大字鶴吉安井

① 鶴吉安井に昔からの古い家のやぶ神さんが、仏さんとしてまつられている。

正月、盆にはシキビのはなをたて、円いダンゴを供える。そして線香をたててお家安泰を祈る。

しかし、正月には輪かざりをし、お餅をお供えする。完全には仏さんになれていないのであろうか。



② かつて竹やぶの中にあつて、あまり気にもとめていなかったやぶ神さんであつたが、霊驗者に拜んでもらったから、丁寧にまつる。新しい社殿をたて毎日拜んでいる。

（相原隆志記）

④ 屋敷神さん信仰

・ 伝承地 大字鶴吉安井

鶴吉安井の集落の中ほどに、田んぼのどまん中に一坪ほど、丸く土を盛り、一本のかなり大きなサカキが生えその下にはジャノヒゲが茂り、瓦の「おむろ」がある。

正月には真新しいシメ縄がめぐらされている。信心深いその田の耕作者がおまつりしているのである。

古老の言い伝えでは、これは昔の屋敷神で、大へん靈驗あらたかな神さんで、そまつにしてはいけないという。盛り上げたその土の中に白へびが二匹いるが、それを見たものは、たちどころに祟りがある。水田にした時にも、その白へびがこまらないように、水の入れ具合も調節しなくてはいいけないという。



いま、その田の耕作者は信心深く、古老の言い伝えを守っている。

(佐伯 守氏談)

④ とくじきさん (とくじきさん)

・ 伝承地 大字鶴吉安井西組

鶴吉安井西組の裏の方に、とくじきさん(または、とくしきさん)といって一坪ほどの建物があった。毎年七月の稲荷神社のお祭りの日に、ここで五、六人が神楽を奉納していたという。田植の終わったあと、田の神であるお稲荷さんに、その年の豊作を祈った行事であった。

昭和のはじめ頃まで続いていたというが、いまは、その建物もなく、神楽も奉納されていない。

その舞台(とくじきさん)の前に五輪石がたっていた。ある人がそれを自分のうちの庭に持ち帰っていたが、寺の住職から屋敷外に移すよう説得され、屋敷裏に安置し、丁重におまつりしている。しかし、この五輪石と稲



荷神社や神楽との関係は不明である。

(渡辺

チノブ氏談)

④③ 庚申信仰

・伝承地 大字鶴吉



鶴吉には庚申さんと呼ばれる小祠が三軒家と賀佐にある。庚申の日には猿の絵のある「青面金剛」の幟がたつ。猿は日吉神社の使令として庚申信仰の対象となっているが、稲荷神社境内にある猿田彦命神社の猿田彦とも符合している。青面金剛は仏教であり、猿田彦は神道であるが、どの小祠もシメ縄が張られ神をまつる方法がとられているが、その前ではお念佛（般若心経）が唱えられ、五穀豊穡、家内安全を祈っている作神、福神である。

安井のある家では、庚申の日には床の間に天狗の姿をした神の軸物をかけ、その前にコウシン木（マサキ）をたて、灯明、洗米、供物をそなえ、お祓いを上げていた。

その天狗こそ猿田彦命であるという。ここでは神として信仰していたのである。
（相原隆志記）

④④ 石鎚神社信仰

・伝承地 大字鶴吉



安井稲荷神社の境内に稲荷神社の本殿と並んで、石鎚神社の小社がある。もともと東組にあった石鎚大権現の祠を、明治九年一二月に出た小祠廃併合令によってここに移し、石鎚神社と改められたものである。

かつて、安井には、村の小学校高等科を卒業し、青年団に入団する洗礼として、必ず石鎚山に参詣してくる風習があった。

七月一日、お山開きに、金の幣をもったお先達に引率され、修験者と同じ行動をする。

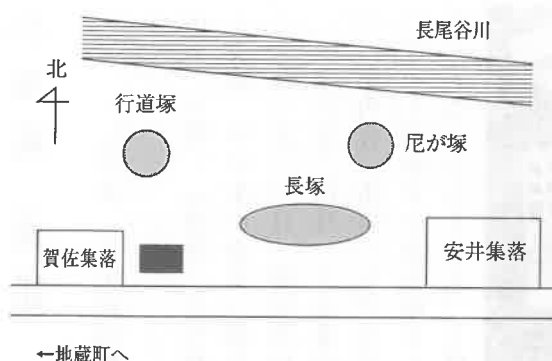
まず、早朝暗いうちに地蔵町海岸で身を清め、海から持ち帰ったホンダワラを小社の軒につるし、道中の無事を祈って出発した。

石鎚山に無事参詣し、帰宅した折も、お礼参りにニッケの根やシャクナゲの葉を奉納していた。

（相原隆志記）

④5 鶴吉の三塚

・伝承地 大字鶴吉



鶴吉から横田を経て地藏町へぬける町道がある。その道に沿って安井と賀佐のやはなれた間に三つのお塚さんがあった。町道のすぐ北側に長塚、その長尾谷川よりには尼が塚、賀佐の裏は行道塚と呼ばれていた。長塚は名のようにやや長い小山で、他の二つは円い小山でいずれも高さは五〜六mであった。

これらは昭和初期の道路改修や予讃線工事のため、その土砂が持ち去られた。

その時、馬の骨が数多く発掘され改葬された。ここに、なぜこんなに多くの馬の骨が……。いつの時代のかの戦乱の跡か、また、死んだ農耕馬の共同墓地か――。

最近、長塚近くの圃場整理中、四〜五基の五輪石も出土した。やはり戦乱の跡か。

(水口傳三氏談)

④6 ヤクシマさん

・伝承地 大字横田北組六五六の一番地

現在は、徳本商店の前 町道になっている。

(明治九年の地図と台帳による。)

現在 松前町横田中窪四二四番地

横田素鷲神社に合祀される。

・祀主 不明(疫鎮の神 食中毒)

・行事内容

日時 七月一六日 午後一二時より

行事・ヤクシマさん当番の人が清掃・幟立て・神殿づくりをする。供物は、酒、御飯、菓子、乾物その他、野菜のキュウリは、疫病のためいけない。

・全員揃ったら組長が先頭になりお参りする。

・伝達事項と協議事項をする。

・田植え休みをかねて慰労会に移る。

午後五時頃まで親睦をかねた会をする。

・当番の人が後始末をすると共に来年の当番に引継ぎをし、解散となる。

(篠崎繁一記)



④7 地蔵（南組）



南組 地蔵

由来 不明（享保一七年餓死者供養による）

・清掃 小学生が春夏二回行う。

春は三月二一日 彼岸の中日前

夏は八月二四日 うら盆の午前中

・行事内容 南組一七戸全員が参加する。（八月二四日）午後六時頃より鐘を鳴らし全戸を回り人を集める。組長が先導し念仏を唱え、子供達がお茶お菓子配る。

組の協議事項と伝達事項をすませ解散する。

移転 蓼原三六〇

番地 篠崎一郎氏宅の一部にあり大正時代到现在の所に移る。大谷川改修工事により再度移転する。

（篠崎繁一記）

④8 素鷲神社



平成6年11月 素鷲神社

・伝承地 大字横田中窪四二四番地（横田駅北六〇〇m）

・主祭神 素盞鳴命（すさのおのみこと）

・配神 疫鎮大神（えきちん）

慶長三年（一五九八年）六月疫病が流行したので、玉生八幡大神社の神主が熊野三社宮を勧請して祇園社と称したのがその由来であるが、明治以後素鷲神社と改称した。

・本殿 流造瓦葺間口一間、奥行一間一坪

・幣殿 間口二間、奥行三間 六坪

・拝殿 間口二間、奥行四間 八坪

・手水舎 間口〇・五間、奥行〇・五間、〇・二五坪

・鳥居 一基 石材

・改築 平成元年に道路拡張のため改修した。



子供相撲大会（春）

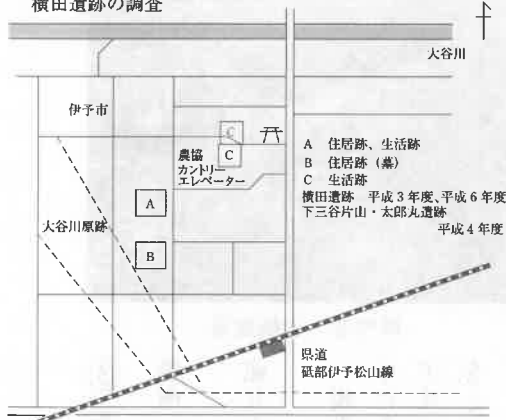


新調されたハッピー

敷地五〇九㎡から四二一㎡となる。道路は八八㎡
・行事 春祭り（四月二〇日が四月二九日に変更する。）
子供相撲大会を午後一時より行う。会の運営は中学三年生が中心となる。
① 前日までに全員で砂場づくりをする。
② 買物と御幣づくり 中三年
秋祭り・一〇月一四～一五日
昭和三五年頃まで大人御輿がかつぎ出されていたがその後人手不足により中止となった。
昭和四七年に子供御輿ができた。（篠崎吉夫氏寄贈）
それ以来親子会が中心となり世話をしてきた。平成六年一〇月には子供用ハッピーが新調された。

（篠崎繁一記）

横田遺跡の調査



④9 横田遺跡
・伝承地 大字横田
・位置 標高六・四m 伊予灘まで二・五km
北は大谷川（天上川）南は四・五kmには標高四五・五mの谷上山がある。
・遺跡周辺の地形
大谷川から流れ出る扇状地の一部である横田遺跡・下三谷の片山遺跡・太郎丸遺跡も同じ弥生式土器、縄文式土器、須恵器などが出土している。横田遺跡C縄文式土器（地下一m）須恵器（地下〇・三m）下三谷片山遺跡A縄文式土器が出土している。Bからは住居跡が見られ、柱の跡・縄文式土器・木炭・排水溝・石器などが出土している。
横田遺跡は川の流れの跡がみられるため川のほとりで生活用具を洗ったり、すてたりしたのだろうと思われる。

（篠崎繁一記）

⑤0 塚跡四ヶ所とその他の塚



耕作者 篠崎 清

① その1

場所 大字横田

泉田一九二番地

祀り主 墓地（篠崎繁蔵）

現在は、墓地一坪町田正俊氏が管理している。



宅地 富田福美

② その2

場所 大字横田

泉田一六七番地

祀り主 墓地（篠崎文七）

現在は、墓地一坪宮田福美氏が管理している。

いずれも享保一七年の餓死者を祀るものである。



耕作者 岩崎俊雄

③ その3

場所 大字横田

泉田一三二ノ二番地

祀り主 墓地

（篠崎謙九郎）

現在は、墓地一坪水田の中にある。管理は金子スミ子氏により年二回ほど祭事をしている。



宅地 町田矩彦

④ その4

場所 大字横田

泉田一九四番地

祀り主 墓地

（森川彌三郎）

二坪（二ヶ所）

現在は、墓地で一ヶ所に集め管理は町田矩彦氏が年数回祭事をしている。
享保一七年の餓死を祀るものである。

その他の塚

横田は、享保一七年の餓死者数が天長寺の過去帳によると一一三名も亡くなっている。檀家数は四〇戸である。いかに多くの人が餓死したか理解できる。本村には四三この塚墓地があるが現在、四か所残っている。

塚のある場所 横田泉田一二五番地から二〇六番地までに、広さ一坪の塚がある。(本村東西組)

広さ六坪の塚 泉田二〇五番地(篠崎傳七氏) 現在は東組の地藏尊、日華経塚、神社が祀られている。

広さ四坪の塚 泉田一三四番地(日野清次氏) 現在は



西組の虚空蔵さん念仏場所となっている。

横田蓼原二六〇番地までに六ヶ所の塚墓地がある。現在は、存在しない。(篠崎繁一記)

⑤1 郷蔵敷跡地とそのまわり

一、場所 横田財之神一二二番地
二、面積 三畝四歩 楠田学校持

現在は、一二二番地と一二一番地を一緒にして岩崎利雄氏が所有と管理をしている。(田)

三、由来は江戸時代殿様に納める米を保管していたが明治になりその蔵もいなくなり篠崎繁子氏宅へ移転した。現在篠崎氏の宅地南東の隅にあったが昭和四〇年頃壊しその跡地だけが残っている。

神社跡地

一、場所 横田財之神一二三番地
二、面積 一畝五歩 横田村持

郷蔵跡地とまわりのようす (明治9年)



三、由来 一五九〇年代まで神社として村人が祭りごとをしたが、一五九八年に今の素鷲神社へ移った。敷地は、素鷲神社持となる。

(篠崎繁一記)

⑤2 御祈禱

・伝承地 大字大溝 本村南組・北組
原田東組・西組

御祈禱の記録帳によると、安政年間から行われ現在も続いている。

・内容・睦月の二二日に白米と餅米を持ってそれぞれの組宿（宿は加入者宅が順番）に集まり、買物・餅つき・料理等手分けして作業に当たる。

・北黒田宗通寺の僧侶を迎え、組内の無病息災を祈禱する。（僧侶は各組をまわる）

・各戸へお札を頂き組の境界へは辻札を立て悪病等が入らないよう祈る。

・自分達で作った料理で会食し親睦を図っている。



記録帳（買物帳）

・時代の移り変りにより昭和の後期からは会食や餅つきをとりやめたり、料理を仕出しにする組もある。

・北組は今も従来通り行っている。

（栗原弘氏談）

⑤3 素鷲社

・伝承地 大字大溝字叶田二一七番地

主祭神は素盞鳴命で、配神は大山咋神おおよまぐのかみであり、官司は玉生八幡大神社の高市良史氏である。

慶長三年（一五九八）疫病が大流行したので玉生八幡大神社の神主が、熊野三社宮を氏子内一二ヶ所に勧請した社の一つであり、流行病をしずめる守護神として尊崇した。

当時は、祇園社と呼んでいたが、明治初年に素鷲社と呼ぶようになった。

・行事内容

・お祭日 四月二九日

・行事 玉生八幡大神社の宮司により祭典

子供相撲

・参加者 大字役員・

神社総代・子供代表

世話役 大溝字場・

神社総代

（栗原忠明記）



⑤4 庚申堂

・伝承地 大字大溝字橋五八六番地

廃城となった松前城から石を運び「たて一〇m・よこ八m・高さ一・二m」の石垣を築き、榎と藤の大樹を植樹して小堂を建て、青面南剛三猿を祀った。

庚申の夜には、地区住民が集まり会食や談話をして眠気を払い夜通し眠らず、七種七色の供物をし三尸虫が体内から抜けでるのを防いだとの伝承がある。

庚申信仰も時代と共にさびれて来ているが、そんな中



にあつて、ここに堂として残され維持管理を怠らないのは、地区住民の心の奥にひそむ信仰心の厚さではなからうか。

現在の堂は、創建三〇〇年を記念して、大正五年に建立されたものであり、いたみがすすんでいる。

(高市喜慶記)

⑤5 菅谷半之丞の碑

・伝承地 大字大溝字橋 (原田墓地)

赤穂浪士の一人菅谷半之丞の墓碑と信じられるい伝えられてきた碑が原田墓地内にある。

北黒田宗通寺の過去帳に「元禄一六年二月四日原田半兵衛内 俗名菅谷半之丞政判 刃氷流剣士 義士四七人之内江戸泉岳寺二而此寺二有」と記されている。

切腹が元禄一六年二月四日で、大石主税・堀部安兵衛・中村勘助につづいて四番目、会錯は大島半兵衛であった。

菅谷半之丞が伊予郡出身であることは「松山叢談」にも記載されている。原田墓地にある碑は、縁者の供養碑であるというべきものであろう。



左の船型の墓碑が古い方

半之丞の碑石として永く伝承され、大切に供養された碑がこの地区にあることは興味深い。

(高市喜慶記)

⑤6 六地蔵

・伝承地 大字大溝字叶田二二八番地

地蔵尊境内

どこの部落墓地にもお祀りされている六地蔵は、人間が現界を去ったとき、霊界への先導をしてくださるのが六地蔵といわれている。

古老の話によると、大溝本村墓地の入口（現在は道路になっている）にずいぶん古い六地蔵が祀られていたが、大正末期・昭和初期・後期と再三にわたり道路改修・拡張により破損したりなくなってしまった。

昭和五七年頃から地区住民のあいだに六地蔵さんを再建しようとの声が高まり、昭和五九年末地区民（本村）の総意により現在の六地蔵が建立された。

別にお祭りや行事はないが住民の厚い信仰を受けている。

（栗原弘氏談）

⑤7 地蔵尊

・伝承地 大字大溝二二八番地

古老の話によると、ずいぶん古く、はっきりした由緒は不明であるが、墓地の横に小堂を建て小型の地蔵尊を安置し住民の信仰を集めていたようである。

その後道路拡張や改修にともないお堂の建て替えを現在地に行った。

・お祭日 八月二十四日

・行事 昭和の初期まではお堂の前庭で百八灯をしていたが、第二次世界大

戦中から中止となった。決まった世話人はなく大字で管理している。地区の住民が先祖のお墓参りをしたあとお堂に立ちより線香をあげてお参りしている。

（栗原忠明記）

⑤8 三つ川について

・伝承地 大溝と永田



三つ川付近の概念図（絵図を参考）

今に比べると、五〇年前迄は、北伊予地区には自然がいっぱい残っていたといえよう。その一つにミツガワがあった。ここは子供の遊び場にもなっており、一〇歳以上でなければ、障害物が多くて行くことが、困難であった。大木が数本もあり、昼でも薄暗く、狸穴があったりして、恐ろしくて個人では決して行かなかった。節分の前にはグループで「パリパリ木」を採りにいった。

川が二本なのに、三つ川との呼称は不思議。三つ川についての伝承は、全く皆無といってもよい。

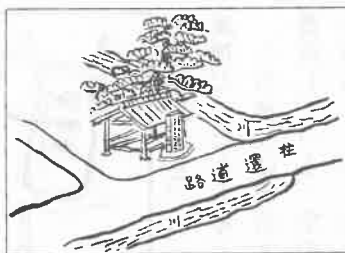
地名（ホノギ）から、ミツガワを考えてみた。それは伊予川（重信川）の左岸にあった、神取、加佐浦の集落とミツガワの関連である。簡単に要旨のみを記す。

- ・神取↑梶取る（古くは舵師、船頭を補佐する役）
- ・加佐（浦）↑「笠」舟をつなぐ所、舟がかりの地
- ・三つ川↑御津川↑津川↑津（津は船着場、後の港）

（中村文雄記）

⑤9 庚申堂跡

・伝承地 大字永田上組
・管理者 無し（元、字）



永田村絵図に石碑を合成

昭和九年（一九三四）の室戸台風の際に、堂並びに根回り二・五mの松は中間から折れてしまった。以後本尊は華藏庵の境内に祠を建てて祀ってある。（本尊は秘仏、青面金剛、盗難にあう。現在の本尊は檜材の像）

庚申信仰は藩政時代が最盛期で、明治以降は時代と共に寂れて、現代では過去のものとなった観がある。それでも昭和の初期は祀られていた。堂の起源などについては不明であるが、大溝原田組の記録が参考となろう。即ち「元和二年（一六一六）に古城の石垣を貰いうけて創建されている。（永田は城郭の一部であった門をもらった）」従って永田もほぼこの頃に建てられたものであろう。

倒壊する以前の堂は、地域住民や通行者の一服する憩いの場所として、また天神祭り用具（提灯一五〇個）の収納にも利用されていた。

（夏井 憲氏談）

⑥0 庄屋道と屋敷について

年代不詳の「永田村絵図」をみると、昔の生活の様子がさぐられる。

上組は三戸、樋ノ口は一戸、本村は一四戸、大下は三戸、西組は四戸、向井（江）は七戸、天神前は五戸の民家が描かれている。民家以外には「庚申堂」「穀倉」「鎮守神社」「天神」「華藏庵」「古庵跡」がある。注目させられるのは、水路や道は現今とほぼ同じであり、川幅が現在のものより数倍も広いことである。

標題の庄屋道とは、渡部宅前から往環道路（県道）に出る小道だと伝承されている。もしかしたらこの付近に庄屋屋敷があつたのかもしれない。忠臣蔵で活躍した菅谷半之丞は土佐浪人として庄屋屋敷に寄寓していたとも



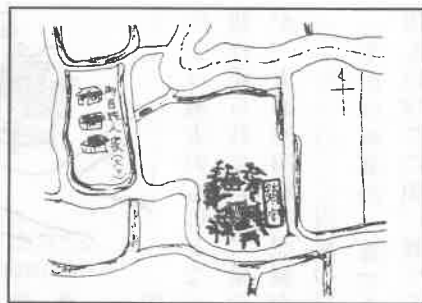
庄屋道と付近の様子

いわれている。もしそうだったら、元禄時代には樋ノ口に庄屋屋敷があつたことにもなる。明和八年（一七七二）には瀧本院、仙蔵坊（共に天台）が永田にあつた、それらから考察すると、絵図は明和以後に描かれたものだろう。

（中村英武氏談）

⑥1 鎮守神社跡地 I

・伝承地 大字永田大下



大下に鎮座していた鎮守神社

から考えると、いつの時代かにあった、「長蓮寺」の守護神だったとも考えられよう。

この神社は明治九年（一八七六）には、既に樋ノ口に遷宮している。字の資料によると跡地は水田となつて、字持ちとなつていた。以後所有者は変更したが、跡地を示す草原が一・五坪ほど、昭和の初期までは存在していた。又、長蓮寺の伝承に関連する「アブラダ」「カナツキ」などのホノギが残っている。

（水口 保氏談）

⑥2 鎮守神社跡地 II

・伝承地 大字永田 樋ノ口

神社の移転や遷宮は、主に災害を契機としているように聞いている。大下に鎮座してあった「鎮守神社」は、いつ頃樋ノ口に遷宮されたかは、今のところは不明である。若しかすると常夜燈が文化八年（一八一）に建てられているから、その頃に遷宮を記念して建てられたのかも知れない。

社殿の配置や規模等は全く不明である。神社は通称「チンゲンサン」といわれていた。明治の末期までは、余戸や岡田方面の住民が、よく休憩した場所でもあった。特に山へ薪採りにいった帰途には、境内にある力石を用いて、力比べを実施していたと……。古老によると、西向きに社殿があったような気がするが……。程度にしか判明しない。



総神祇の常夜燈

神社は更に明治末期（？）に岩鋪天満宮に合祀され、跡地は協議所やポンプ置き場として利用されていた。

（池田 豊氏談）

⑥3 華藏庵と平家落人伝承

・伝承地 大字永田 天神前



平家伝承の位碑



「大乘妙典一字石」

宝永年間（一七〇四）一〇）平氏の末裔と称され、十数人を使用する富豪「平助廉」は嫡子が無く没落し菩提寺も破損してしまった。後、天明二年（一七八二）元横田村の庄屋であった松崎与五左衛門の肝入りで、法龍寺（城下の）第八代暁堂

和尚の隠居所となった。

庵を改築するに当たり、付近にあった、墓や塚を整理したところが、以後関係者は病気や、火災の災難にあった。墓等の祟りと考え、暁堂和尚は経文を収め、「大乘妙典一字石」を建てたら、祟りは、無くなったと伝えられている。

また一説には、整理された墓の一部には、平家落人の墓があったともいわれている。壇ノ浦合戦後、松前浦に上陸した平家の落人は、永田付近に居住していた。しかし追討が厳しく、討ち取られたといわれている。庵には尼さんにまつわる伝承もある。

（福嶋正利氏談）

⑥4 ダイバ神楽

・伝承地 大字永田 鎮守神社



怖かった「ダイバ」

鎮守神社の春祭りには、神社の舞殿で「ダイバ神楽」が奉納されていた。それも時期は不明であるが、おそらく、明治時代から大正を経て昭和の初期まで、実施されていた。明治の末期から大正の初期までは、ダイバ神楽であり、以降昭和の初期までは「巫女神楽」が執り行われていた。

神楽の内容等については、ほとんど不明である。古老は「子供心に、髪が乱れ、目が太くて怖かった」との、印象をもらしている。巫女神楽は二人または一人が、円形に舞っていたのを記憶している。

この神楽は、玉生神社の神職一家が奉仕していたらしい。関係者は今はほとんどの人が死んでしまった。

神楽の奉納は、主に午前中の実施で、多くの村人が見物したわけではない。神楽の奉納には、それ相応のもてなしや、初穂料（謝礼金）などの経費がかかったと聞いている。

（澤田勇雄氏談）

⑥5 小富士松由来記について

・所在地 大字永田 天神前



小富士松（天明四年の木版）

「由来記」は字に保管されていたのだろうが、今はない。（由来記と思われる写しが、町内の個人宅にはある）また松に関する資料として、明治四二年頃に編集された「北伊豫郷土誌」によると、

九州太宰府ヨリ持ち帰りシモノヲ神告ニヨリテウツシタルモノニシテ此ノ地ハ岩鋪原ト云ヒシ所ナリ、地稍高ク松ノ生ヒ立チ近江ノ国唐崎ノソレニ似テ風情アリ其ノ大サ等ニ於テモ実地見クラベタル所ニテハ余リ劣ルマシト考フ。（原文まま）

現今の筒井の住人某上京し尾ノ上の松の下にてまどろむ内当松を自国へ持帰べきことを神夢に見せたり依て持ち帰り自宅に之を成長せしむつとありしに又再び或夜夢見るに此の松を南東の原（目下の処は其昔一面の大の原なりきと）に移し成長せしむべしとの神告あり再び此の地に移したるものなりと。

（中村文雄記）

⑥⑥ 根上がり松

・所在地 大字永田 西組



不正を正す根上がり松

大正の初期頃までは、

字内に目通り二抱えぐらの樹木が各所にあつた。通称ヒチジョウ、ホルトノキと呼ばれている、モガシがよく成長していた。

それよりも永田は松が

有名だった。それらは「小富士松」「庵の大松」「根上がり松」「庚申松」であつたが、総て消滅してしまつてゐる。

根上がり松（一本松とも）は、名の如く、蟬が足を延ばしたような恰好をしており、幹は真つすぐ、目通り一抱え半もある大松で、回りよりも1mも高い盛り土に立つてゐた。この松は、「大松さん」と共に、永田の地域を示すものにもなつてゐた。

大樹と言われるものには、地域でそれぞれの寓話がついてゐるように、この松には「ほごつり」伝承がある。松を敬い、恐怖の対象に仕組んだことは、先人の生活の知恵ともいえよう。自然に対応する考え方や態度、人間としての生き方を、寓話として伝えたと解釈することが、先人への報いになるだろう。

（澤田明利記）

⑥⑦ 塚三基

・所在地 大字永田 西組
・管理者 三好 浩

藩政時代には、そここに数多くの塚があつたらしい。因みに明治九年（一八七六）の野帳を開けてみると、永田地区には一〇か所にも及んでいる。

明治維新以降、塚は整理（消滅）されたり、墓地に合葬されたりして、現在まで残つてゐる塚は、二か所のみだろう。

この塚は、以前（二五〇年前）は田の真ん中にあつたが、耕作に大変不便をきたすので、畦道にやむなく移転をさせてもらったのだと伝承している。塚は盛り土と、石があるだけで、数も不明だったが、三基分のオムロを整えて祀り始めた。



今も祀られている塚

祀り主は不明。戦国時代か、荻屋口の戦い（関ヶ原合戦）で戦没した、他郷の人かも知れない。（西古泉にも似たような、多くの塚があつたが、明治末期の耕地整理で総て消滅したとのこと）

（三好 治氏談）

⑥8 東古泉村の成立と性格

沿革 東古泉村は松前町では最も成立の新しい新田村である。字極楽・恵竈・上又・神取など主として上組の集落は、旧重信川の自然堤防と思われる位置に、これに対して、字四ツ黒・菅田など主として下組の集落は、旧重信川河口近くの中州と思われる位置に立地する。

上組の集落形成は下組より古く、加藤嘉明の松前入国の頃には、小さいながら、その成立をみていたようである。

慶長二年（一五九七）の作製とされる「古泉絵図」玉生八幡社蔵）に金蓮寺の東および南の畑は東古泉の畑であることを記入していること、氏神社である素鷲神社は、同三年に疫病平癒を祈願して建立したと伝える「神社由緒記」などから首肯され得るのである。

下組の成立は正徳元年（一七一）頃から成立された。村の成立、古泉村が分かれて公的な東・西古泉村が成立したのは元文三年（一七三八）であるが、明和七年（一七七〇）地坪を期に、東・西古泉村の境界を定めた。

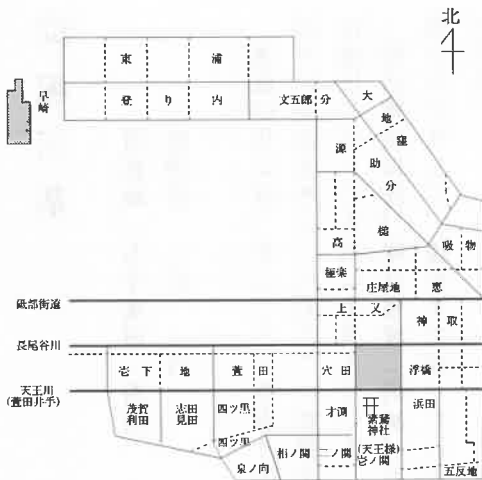
（三好節夫記）

⑥9 明治初期の東古泉村（東古泉区長蔵）

註一・浜村地（一ノ関）は明治まで飛地となっていたが、明治二二年（一八八九）の町村合併で大字東古泉に編入され、東古泉分であった字早崎は松前村に編入された。

註二・明和七年（一七七〇）の地坪水帳によると、同じ境遇、階層の農民の村づくりが共同意識の結びつきの上に進められてきたことである。同年五七戸のうち、その三分の一余りの二〇戸が、田地一丁歩前後を所有する。自立可能な小農階層で平等な仲間意識で結ばれた、自主小農をめざす農民の上に成立した、村落共同体であったといえる。

（三好節夫記）



明和七 寅年
伊予郡東古泉村御田地坪水帳
三月
(東古泉区長蔵)

⑦⑩ ふるさと東古泉の歴史

- 古泉の名「濃染の里」 神功皇后(二〇〇年)ごろ
- 滝姫 松前の浜に漂着 永承七年(一〇五二)ごろ
- 松前郷筒井浜古泉寺町の四ヶ村 承安元年(一一七一)ごろ
- 素鷲神社 一の関に建立 寛喜四年(一二三二)
- 大森彦七 松前地方を支配 建武三年(一二三六)
- 加藤嘉明 伊予川を改修 文禄四年(一五九五)
- 松前村から分かれ、古泉村成立 寛文一一年(一六七二)
- 古泉村から分かれて、東古泉と西古泉村となる。 元文三年(一七三八)
- 註 東古泉村を通称稲家ともいった。
(一七七二—一八〇)
- 筒井村の市衛、滝姫と侍女三人を合葬し、四ツ黒権現を建立する。
(一七七二—一八〇)
- 元禄元年(一六八八) 三一町四反五セ二五ブ三〇九石〇七六合
- 寛政四年(一七九二) 四三町九反九セ〇一ブ三七〇石九八三合
- 明和七年(一七六〇) 五七戸
- 明治十年(一八七七) 七三戸
- (西古泉金蓮寺壇家三七戸 筒井大智院一五戸)
- 平成六年(一九九四) 一三九戸

(三好節夫記)

⑦⑪ 稲納屋(稲屋)

・伝承地 大字東古泉

元禄の初めに、筒井の百姓である、勘五郎が城の東南方にある肥えた水の便のよい土地を見つけ、友達の源助、文五郎と相談し、田に稲納屋を建て、出作した。秋の取り入れが終わると、その稲納屋を閉めて、本宅に帰った。このような百姓が増えて、田には所々に稲納屋が建てられるようになった、当時の人々はこの土地を「いなや」と呼ぶようになった。その稲納屋は自分の居宅から距離が遠くて、不便であるために、本宅を稲納屋の南方に建て、永住の土地とした。

元禄の末から享保の頃には隣村から数多くの人々が移住した、又市坪、久米、遠い所では風早などから移住する者があって人家が著しく増加して一つの部落を形成するようになった。その当時この「いなや」は古泉に支配されていたが、元文三年(一七三八)古泉の支配から独立して、古泉の東にあるので東古泉というようになった。今から二五五年程前のことである。

現在は松前町東古泉となり、稲納屋に早くから出作した者の名前をとった、勘五郎分(ぶ)源助分、文五郎分の地名が残っている。

(東古泉御田地坪水帳)

⑦2 辰之助信仰

・伝承地 東古泉三七七番地

足の病気を治す石仏として明治後期より尊崇され、遠隔の地より参拝者も多い。「草鞋」を奉納し、心願成就の幟が一時は一五〇本も納められる程尊く信仰された。由緒については、口碑により次の通り伝えられている。明治中期、東古泉に三好某あり、ふと足の病にかかり、足が立たず、二年間医師にかかり、治療に専念したが治癒の望みを絶たれ、絶望の果て、祈禱者に救いを求めた。すると祈禱者に靈告あり、「自分は奥州の横山辰之助、山嶽を跋涉して修験に励み、この地まで来たが、十一月



辰之助廟

二三日往生する運命となった。三好家が積んでいる堆肥の下になっっている尊い仏具も共にある、また崇拝する石仏が川に降りる「くみじ」（堤防から川におりる階段）の踏石になっており、これらを祭れば足の病は、たちどころに治癒しよう」とのことであった。驚いて靈告のままに小堂を造り、丁寧に祭祀を行うと、翌日から野良に出られるようになった。以来辰之助の靈告のとおり毎年十一月二三日を祭祀日としたが、伝え聞いた近所の人々はいうに及ばず遠隔の地よりも参拝者があるようになったという。

（三好節夫記）



庚申堂

⑦③ 秋祭の行事 大字東古泉（全域）

・行事の内容 高張提灯（子供会）Ⅱ一〇月一三日・一四日午後六時頃、子供会全員素鷲神社を、高張提灯に火を灯して出発、一三日は字内の主要道路を、一四日は各家々を廻り、五穀豊穡と家内安全を祈願する。

獅子舞（保存会）Ⅱ一〇月一四日・一五日両日、素鷲神社に奉納した後、昔からの使い来たりの家（今はない）新築した家、新しく転入者の家、また「いれは」に出演している子役（猿、狐、狩人）の家、其の他希望する家にて奉納する。

神輿Ⅱ一〇月一五日午前六時、玉生神社を宮出し、字中の家々を巡回する。各家では、お祓いの水と、白米二合を準備し、神輿に対し、散米し、お祓いをして、五穀豊穡と家内安全を祈願する。

戦後担い手が少なくなったため、庚申年に、御神体を移して、巡回するようになった。昭和五四年より子供神輿がこれに変わり、子供会全員（男・女共）参加して盛大に行われている。

（三好節夫記）



⑦④ 御祈禱

・伝承地 大字東古泉（全域）の年中行事

・行事内容 日時Ⅱ一月二〇日に一番近い日曜日 宿元Ⅱ各組共願番制であるが、前年に新築した家、又は新しく転入者の家があればその年の宿元となる。宿元は事前に神棚を準備し、玄関に海草を着けたノ縄を張る。当日は祭壇に鏡餅と、お米、お神酒と、小皿に海水（満潮）

を入れ、南天の小枝（お祓い用）をお供えする。

午前八時頃より僧侶が順次、各組を廻り、お祓いと、お経をあげて、家内安全と、組中安全を祈願する。家内安全のお札を組内全戸分と、組中安全のお札四枚、これは組の東西南北の四角に立てる。

正午前全員参集し、必要事項の伝達や今



年度の組内の役員と来年度の宿元などを決めて昼食し、懇談する。適当の時期に鏡餅を全戸分に切り、お札を各自に配り、お神酒を頂いて解散する。

参考

(この項、早瀬保氏談)

戦前は二日間行い、一日目は出席者(男子)は全員宿元に泊る。二日目は、昼食は組内の子供達も全員来て食事する。野菜などは各人が持寄り、全部男子が、手料理する。最近は日程も一日だけとなり、料理は殆ど仕出しを頼むようになった。

(三好節夫記)



念仏講の様子

⑦5 念仏講

・伝承地 大字東古泉全域

・由来 不明。明治二六年各組の他の講も一つの念仏講に合併統一したものだと思われる。

・行事内容Ⅱ字内各組共通、各組順番に当番(宿元という)を決め、毎月都合のよい日を選んで行われていたが、現在は一年に二回の組もあれば、三回の組もあり、毎月一回行われている組は殆どなくなった。

当日宿元は組内全戸より、米一合を集めて、小祭壇を作り、弘法大師の掛軸を掛け、ダンゴ一盛、小豆飯を椀に大盛り、しきび一枝、鐘、線香、ローソクと茶菓子等を用意する。夕方大体全員揃ったところで、ローソク、線香に火を灯し、長老がお先達をつとめ、鐘を叩いて、念仏を唱え、全員が唱和し家内安全と、無病息災を祈願する。

終わって食事をしながら懇談する。組長の連絡事項や、農作業の事や世間話に花を咲かせ、頃合いをみて解散する。念仏箱は翌日次回の当番に廻す。

・参加者Ⅱ各戸主(男) 現在は女性も参加するようになった。

・世話役Ⅱ順番

(三好節夫記)

⑦⑥ 亥の子

・伝承地 大字東古泉

・由来 はっきり、わからないが古くから行われている年中行事の一つである。

・行事内容 十一月(旧暦一〇月)の亥の日に男子の出生を祝って亥の子をつく。夕食後、子供達は「ワラ」を一束ずつ持って、亥の子唄を歌いながら、道路を叩いて廻るワラ亥の子があつたが、現在は殆どつかなくなっている。みかげ石の石の亥の子をつくのは現在も行っている。



る。男子が新しく出生した家が宿となり、小中学生の男の子供達に夕御飯を出して接待する。その後宿の庭に「おいのこさんという人は…」に始まる亥の子唄を歌って亥の子をつく。それが終わると、道路の辻々に亥の子をついて廻り、最後に宿に帰り遊んで解散する。

(三好節夫記)

⑦⑦ 「ホゴ吊り」の話

・伝承地 大字東古泉

昔私宅の裏の長尾谷川の川縁に大人の手で二回りもある樟の太木が二本生えていた。その附近は、竹藪や雑木など鬱蒼と茂り、昼も暗く、加えて、石の一本橋の袂には墓地があり、夜間は「ホゴ吊り」が出ると恐れられて、通行する人もなかったと言ひ伝えられていたが、戦後楠の大木は、二本とも枯れてしまい、加えて長尾谷川の改修工事のため、これらの竹藪も橋も墓地も取り払れて跡形もない。従って、いつの間にか「ホゴ吊り」の話は、途絶えてしまった。

(早瀬 保氏談)

⑦⑧ 「タノモ」さん

・伝承地 大字東古泉

八朔は陰暦の八月一日の行事。秋の収穫を前に農村では大切な日である。「タノム」「タノモ」ともいう。田の実際の節句の事で稲の実りを祝う行事である。若稲の穂を摘み、それを煎り米にして神に供え相伴した。米の粉で動物の形を造り、「タノモ」人形を造る所もある。

私達が子供の頃は旧暦の八月一日を「タノモ」さんと言ひ、薄い杉の板で舟形を作り色紙の着物を着せた人形五人を乗せ、艫に旗を立てた舟に、米の粉で造った「ダング」を乗せ、台風や海難事故で亡くなった人の冥福と今年の豊作と平穏無事を祈って、川に流したものである。その行事もいつの間にか途絶えて久しく、今では憶えている人も少なくなってしまった。

(早瀬 保氏談)

⑦9 明治年間・豊作と不作の記録（三好岩太郎覚書）

年 摘 要

二 米・麦大不作穀物大暴騰雨多し
六 冬・春五八日間雨なし。井戸掘り盛ん、大洲領は殆ど植付け不能、南横田土手より南一面白浜となる。

九 地租更正

一〇 西南戦争

一三 米価暴騰す

一六 旱魃なれども豊作（東古泉と永田と水争いあり）

一七 大暴風雨風浪あり。金蓮寺前まで舟来る。大可賀新田決潰す

筒井方面海となる。死者も出る。

一九 泉堤防決潰・浜大洪水、その後耕地整理をする。

（愛媛県が最初なり）

二二 土用中雨続き、凶作

二三 麦凶作、米豊作なり。

二六 中通筋豊作、八〇日間の日照り続き、南伊予その他山麓等は旱魃にて不作、松前宗意原は草原となる。（東古泉 永田・西古泉と水争いあり）温泉郡は半作

郡は半作

二七・八 日清戦争、兩年共平年作

二九 冷風雨多く凶作

三〇 曇天多く氣候不順 大凶作

三一 未曾有の大豊作

三三 平年作

三四 中不作

三五 土用雨多く不作

三六 旱魃なれど豊作

三七 日露戦争始まる。平年作

三八 戦争終わる。大豊作

三九 平年作

四〇 豊作

四一 土用後は天気申し分なし、されど平年作

参考

大正一〇年は米麦暴騰し各地に米騒動起こる。寺内内閣は外米を輸入して、米価の調節をする。寺内内閣は原内閣と変わり、初めて政党内閣となる。

昭和九年 旱魃にて平年作に達せず。この頃より地下水を動力発動機で揚水するようになった。

昭和一三年は大豊作大旱魃、七月始めより九月上旬まで八〇余日のうち一度降雨ありたるのみ。

平成六年は大豊作

平成六年七月一日より九月一日迄七三日間連日三〇度以上の猛暑であった。

北伊予地区の職業・店（小売） 明治～戦前まで（1945、昭和20）

職業・店	徳丸	中川原	出作	神崎	鶴吉	横田	大溝	永田	東小泉
風呂屋				●					
下駄屋			●			●		●	●
水車					●			●	
ブリキ屋			●						
豆腐屋	●		●	●			●	●●●●	●
精米所	●	●	●	●●	●●			●●	●
提灯屋				●					
糸屋								●	
電気屋			●	●					
鍛冶屋				●				●	
鑄掛けや			●						
床屋	●		●●	●●				●	●●
駄菓子店		●	●●●	●●●●	●●●●	●	●	●●●●	●
樽屋		●						●●	●
うどん屋（製）		●	●	●				●	
うどん屋（食）				●	●				
たいこまん屋				●				●	
なんでも屋			●		●●				
大工	●	●	●●	●●●●	●	●●	●	●●●●	●●
産婆				●	●	●			
医 院	●				●			●●	
活花教授		●	●	●		●		●	●
自転車屋			●	●●					
製材所									
呉服屋（洋品）			●	●		●			
仕立てや			●	●	●				
左官	●	●●	●	●●				●	
按摩									
歯科医			●						
祈祷師	●		●						
油 屋				●	●				
酒屋（造）					●			●	
酒屋（売）	●	●●	●	●				●	●
タバコ屋	●	●●	●	●●	●●	●		●	●
文房具屋			●	●					
紺 屋		●				●			●●
傘 屋				●					
髪結		●	●	●					
質 屋									
芸 人			●	●●					
バット、ライス屋								●	
石 屋									
荷馬車（牛）	●	●	●	●				●	
籠 屋	●								
綿打ち屋									
縄 屋									
むしろ屋							●		
機織り					●				●
金貸し									
屋根葺屋	●	●							
葬儀屋			●						
井戸堀屋				●					
植木屋									
伯楽（バクロウ）	●	●			●		●	●	
運送			●					●	
薪炭				●				●	
車貸し								●	
人力車					●●			●	

『北伊予の伝承・Ⅱ』企画・編集委員会名簿

委 員 長	神 崎	野 本 勉
副 委 員 長	徳 丸	仙 波 文 治
副 委 員 長	鶴 吉	相 原 隆 志
副 委 員 長	永 田	中 村 文 雄
委 員	徳 丸	仙 波 貢
委 員	徳 丸	後 藤 正 宜
委 員	徳 丸	田 中 義 和
委 員	中川原	加 納 信 光
委 員	中川原	本 田 力
委 員	出 作	高 市 慶 久
委 員	出 作	西 村 博 明
委 員	出 作	弓 達 茂 夫
委 員	神 崎	河 野 好 雄
委 員	神 崎	山 口 稲 男
委 員	鶴 吉	久 津 那 安 男
委 員	鶴 吉	済 川 裕
委 員	横 田	篠 崎 繁 一
委 員	横 田	日 野 佳 孝
委 員	大 溝	栗 原 忠 明
委 員	大 溝	高 市 喜 慶
委 員	永 田	澤 田 明 利
委 員	東古泉	稲 垣 孝 明
委 員	東古泉	早 瀬 秋 利
委 員	東古泉	三 好 節 夫
松前町東公民館長	神 崎	高 市 徳
松前町東公民館主事	昌 農 内	重 川 善 彦

